Feb. 1899
no. 482

明治三十二年二月廿五日

女學雜誌

第四百八十二號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百八十二號目次

◎社說

海舟先生の日常(下)

◎女學

花園隨筆(古在紫琴女)

家庭に於る父子の關係に付て

他人の善惡

恩惠の記臆

上眞行氏の音樂談(青柳有美)

近松女氣質(其一序論)　櫻井鷗村

◎隨感

草木國土皆性あり

殺生のあそび

淺ましき人の終

天父の慈愛

矜恤ある者は福なり

◎雜錄

二つの微笑(有美)

◎時事

所謂内地雜居準備とは何ぞ(鷗村)

◎新刊書

當議台(次郎)

◎新雜誌

數種

◎片々◎時報

農業本論評(東根)世界讀史地圖。新万国地圖。

佐久間象山。敵討襃持院原。新小說。

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する吾儕の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんとするを旨とす。

◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみと指定して所望せらるゝものあらば其の需めに應ずべし

●女學雜誌定價表●

前金	
壹冊定價	拾錢
半年分定價	壹圓拾錢
一年分定價	貳圓
(内國無郵税)	

◎代金は總て前金にて御注文ありたし

◎年末引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送することも可有之事

◎但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事

廣告料		
一行(廿七字詰)一回		前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

送金　送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし、郵便切手にて送らるゝ人は總べて一割增にて計算せられたし

明治三十二年二月廿四日印刷

明治三十二年二月廿五日發行

發行兼編輯人　巖本善治

印刷人　布川孫市

東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地

發行所　女學雜誌社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　株式會社秀英舍第一工場

(電話本局十九番)

社告

女學雜誌前金定價改正の事

女學雜誌前金定價は。上段の表、記載の如く相定め來り候處ろ。前金、後金、混雜いたし。受取計算の節、往々行違となり、御手數も尠からず。弊社に於ても、往々御氣の毒いたし候事、殘念の至に付。今後は、前金頂戴の節 上表記載の如く(一年二圓即ち一冊八錢三厘餘の割にて)計算いたし、後金は惣て、一冊十錢の割にて、計算可仕事に、一定候間。不悪思召被下度候。右御斷り申上度謹言

但し右新規則は來る三月より實行可仕に付。前金滯の御方は、二月中に御拂込被下、一時御淸算被成下候はゞ仕合と存候

明治三十二年一月　女學雜誌社會計

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第四百八拾二號

明治三十二年二月廿五日發兌

社説

海舟先生の日常（下）

◎日々來客に接しての談話は、人に對し、機に應じてのお話しで、すべて活機の應接であるから、其言葉丈けを聞いて先生を許するよりも、寧ろ其の聞いた人相應に、先生の一部分が映つたと云ふより外はない。夫故、聞くものも、殆んど其言語を忘れ去つて、而も尚ほ一物を存し、永久之を失ふとの出來ぬよふな記臆が殘る。所云ゆる、生命の上に印刻を打れたよふな感じがするのである。

◎『ひどく言つてやると、怒つて歸るが、二三年すると分ると見へて出て來るよ』と言はれしとあるが、眞に其の激烈な時は、痛言、痛罵、此上なき程の悪口である。然し、急喝短評の下に沸々たる熱血を存し、如何にも痛快で、如何にも信切な所があるから、迚も之れを忘却して仕舞ふと云ふとは出來ぬ。其の痛言の時は、生命がけと云ふ調子で、生命が言語の中にこもつて仕舞つて居る。又、靜かに落付いて話される時でも、其の見解が丸るで世人と違つて居るから、最初は冗談のよふに聞こえて只だ可笑しい計りである。古人の句に、笑はずんば道とするに足らずとあるが、先生のお話しに於て屢ば此語を思出す。先づ大抵の人は笑つて面白がつて計り居るが、少こしく慣れて其の話の主旨を聞分けるよふになれば、言々皆な精神、一切熟練徹底せる悟りの見識であるとに氣付き、片言隻語も珍重して聞き、篤と思案して其の意味を考へるようになる。

◎始終、お使ひ慣れの言葉があるが、其意味は通俗と少し違ふ。考へて見れば、違はぬのであるが、先づ通常の人の用ゆる見解とは別である。例せば、よく人の事を許して、『あれ

は、いゝ人だ』、又た『いゝ奴だ』と言はれるヿがあるが、之は、あまり、尊重した意味ではないので、然し又、馬鹿にした意味でもない、一種文字どふりの意味である。此の文字に反對した言葉が『あれはヒドイやつだ』と云はれるのであるが、之も悪人と云ふ意味ではなかつた。

◎熱誠、熱血で、二三時間も立つゞけのお話しの時は、眞ヿに千古の一大演説とも云ふべきもので、光彩燦爛英氣堂々人を壓倒する。聽くもの一分の間隙もなく諦聽、禁へざる心地であるが、其の靜平閑寂として、ポツリ〳〵、キレ〳〵の覺悟をお話しの時は、更に格別であつた。一々、偈語を聞くよふな心地がした。

◎先生談話の中に、忽まち兩眼滿目の涙に潤ふヿを見るのは毎度であつた。就中、人の立派な「覺悟」「決心」又は憫れむべき事、氣の毒なる事、淺ましき事などの談話に至れば、必らず兩眼の潤ひ來る驟雨の俄かに兆すの狀であつたが、未曾て落涙せられたるを見たヿはなかつた。

◎天氣の晴雨、寒暑と云ふヿは、餘程注意されたよふに見へて、時候の挨拶と云ふものの無いヿはない。いつでも、部屋

の中に居られるヿゆへ、『雨カエ』、『晴れカエ』、『風カエ』、などとお附の人に聞かれるヿは屢ばである。始めは、船の生涯にお慣れなすつたセイかと思つて居升たが、夫計りでない、別に主意があつたらしく思ふよふになつた。

◎誰はどふした、ドノ家は如何なつた、何處の地方はドウなつたと云ふ様なヿが、日々の研究で、人の談話の中から知らぬ間に聞いて仕舞はれる。聞くよふにして聞かれるのではない、無心の際に聞取て仕舞はれるのである。ソウシテ、其人から其の仲間を推し、其家から其地方を推し、其地方から國勢を推すと云ふよふな研究は、大病の中でさへ、曾て止められたヿはなかつた。

◎大分、御世話になつて其の發達に掛念せられて居る事業などの事は、ワザト人の前で非つて見て、其人が何と云ふかと試ろみられる。又、其事業の評判が何處ら迄、響いて居るかと云ふことを試みて、丸るで別種類の人に聞いて見られる。右に、左に、斯様な風にして尋ねられるヿゆへ、其眞相のかくれよふが無いです。

◎序文を賴みにゆくと、其人に序文を書かせて、文が出來上

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ると、先生が之を書かれることが屡ばある。吾輩が初めて先生にお目にかゝつたは、明治十九年で、木村鐙子小傳の序文を頼みに往つたのであるが、スルトお前書けと云ふことだから、書いてもつて行くと、すぐ直筆で之を寫された。此樣なことは他に幾度も例がある。信じるの、重んずるのと云ふ意味でない、たゞ其時の塲合である。

◎先生の揮毫と信じて所持して居るものが、時々持參して鑑定を乞ふことがある。すると、大抵はどれでもさうだらうと言つて還される。或る時、非常に立派に表裝したのを持つて來て、鑑定を請ふた。吾輩が一見しても僞物だ。然し、先生のお心を知つて居るから、默つて居たら、附の女中を召んで『どうだらふ』と言われる「サア、御印がズット前ので、お書きなすつたよふにもあり升」と答へられると『夫ならお前よくソゥ言つて置け』と言はれた。先づソゥ云ふ調子です。

◎揮毫は、全紙一枚に半分間もかゝらぬ程、早くて、而も、話しを仕乍ら、チョイ〳〵と書れるのであるが、書かれる時は、氣の滿ちた時計りであつたらしい。一ト月に七百枚位ひ書かれたこともあつた。

◎毎年、毎月、毎日、同じ座敷に同じ樣に足倉をかいて、朝から晩まで客と談しをして、少しも倦むと云ふことなく、一寸と庭に出て散歩すると云ふ丈けの事すら爲さらぬ。此の一事だけでも、既に常人の耐えがたき所である。少しは、外にお出になるやうにと、勸める人もある、中には心配してお奨めする人も有たが、一向、聞かれない。或る時、某と言ふ著名の醫學博士が同樣の勸告をして、運動とか、衞生とか云ふ例の説教をすると『ソンナ事は馬鹿にお言ひなさい、己の躰には、運動は入らないよ』と言はれた。冬でも、火にあたると云ふことはない。一昨年迄は、スッ裸で寢られた相であるが、『去年からは、單衣一枚は用いるが、帶をすることは出來ぬ』と云ふお話しであつた。又『己は、今ま死ぬるとなつても、人のよふに、ウー〳〵は言はぬから』と言つて居られたが、平素、身躰の持ち方は、如何にも修まつたものであつた。

◎一昨年、珍らしくも、銚子に行つて見よふと云ふお話しであつたが、其後、念を推すと、どふも一日でもあけると、又あとが困ると云ふお話しであつた。『色々相談にのつてる所もあるから、一日留守にすると、手後れにもなり、其の翌る

日は夙くからヤッテ來るから、少しも出られぬ」と云ふとで、其の外出して奔走されぬのが、即はち尤とも世話しい故であると悟つたとがあつた。

◎始終、出入するものに、たとひ用があつても、之を呼ぶと云ふとは、殆んど無つた。其の來るを待つて話されるのみであつた。もし其の來とるが餘り遠のけば、「某はどふしたか」位ひの話しが出る。其の時はキット用のある時である。夫故始終出入するものは、よく此工合を承知して、此事を傳聞すれば、直きに行くよふにしたものである。

◎夫故、人に物を頼むと云ふよふにして頼まれるとは、殆んど無いとで、大抵は、自然に話の續きから來るよふにせられたものであるが、たまには左様でないともある。其時は、あとで手厚い禮などを爲されるが、豈に圖らんや、之は其人の困苦を救はんが爲に金を贈るの方便にせられたのである。

◎「跡を消す」と云ふ事は、先生平生の覺悟で、亦、お得意の所であつた。餘程に注意して、其の形跡を探つても、中々、分らぬ。實に、驚ろくべき巧妙なものであつた。偶ま、外に出られるとなどがあれば、意外な用向があるので、其の表向

四

の事は何でもないのである。樞密院へ出られても、后の方に居て、人が立つと立つ位ひで、老耄極まる調子であつたらしい。大抵は欠席されたよふだが、其の出られる時には、必らず他に一つ二つ緊要の用向があつたよふに見受られた。

◎天稟、根の善い上に、更に根を善くせられたものと見へる。人を評するにも、強根と云ふとが度々出たが、西洋人を賞められる言葉の一つは、いつでも其の根の善いと云ふとであつた。ソレデ、先生の強根も亦た驚ろくべき者で、大抵の書き付は、極の細字に至るまで、皆な自筆である。『今まで何でも一人でやつたのだから、モウ少しの所を人に頼むでもないと思つてナ』と云ふお話しであつた。夫故、一生經歴せられたる出來事は言ふに及ばず、大事件は皆な自筆で筆記せられてある。此の明徴にして周到なる人が、而も自筆で一々書き付けられてあるのだから、凡そ此の五十年間の活歴史を万世に遺すには、先生の文章に超ゆるものはあるまい。之は勝家の寶たるのみならず、將來の歷史に國寶となるであらふと信ぜられる。

◎遠くから先生を想像するものには、八面玲瓏のお人と思は

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れる。尤とも近く先生を見るものは、南洲先生の所云ゆるドコ迄、智略のある人かと思はれる位である。然し、三度や五度の面會、もしくは時を隔て丶折々に面會するものは、先生の談話が如何にも調子が違つて、耳が遠いようで、近頃の事情に殆んど迂遠なように見へるから、隨分、先生を欺むく人がある。すると、二三度迄は、ワザト其の欺に乘つて、其の欺むき工合をおつと見て居られる。夫でも、まだ止めなければ、『モウ、い丶かげんに止してはどふだ』などと言はれて、びつくりするものがあつた。

◎人事を盡して天命を待つと云ふ語があるが、先生に於て眞とに善く此の實行を見た。就中、天命を待つの『待』の一字は、先生の特色で、凡そ、待つと云つて、先生の如く、辛棒強い待ち方は、只だ驚歎するの外ないのである。油汗を流し、血の涙を搾ると云ふ苦心經營で、先きに／＼とチャンと準備をして、而して、徐ろに其の出來事の顯わるるを待ち、其の出來事の顯はる丶や、人知らず自然に行わる丶よふに結び付けて仕舞はれるから、大抵は其の痕跡を見ることが出來ぬ。夫故、機に先だつて、何事でもズン／＼處置して置れる、苟くもズルケテ後らかすなどと云ふとは無つた。揮毫を頼まれても、其人が歸ると直ぐ書いて置くと云ふよふな調子であつた。若し、機到來して其の準備がなかつたならば、直ちに機后の機を逸さぬよふに着手して、所云ゆる後の先と云ふもので勝つ工夫である。此事、斬然として處置し了れば、靜かに默想觀念して、其の機に後れたる所以を省りみ、鈍智薄識の端を捉らへて深く警しめ、深く考へられる。先生の所云ゆる寢學問なるものである。夫故、愚痴と云ふものが少しも無く、日に新に又日に新たにと云ふ驚ろくべき、進歩の工合を、吾々でさへ少こしは窺ふことが出來た。『維新の際は、まだ若かつたものだから、廉があつて、ダメだ、今ならば、夫は巧妙にやつて見せる』などと云ふお話しもあつて、決して舊功を誇られると云ふ主旨はない。屢ば、維新前の事を說かれたのは、別に一つの主意があつたものと思はれる。

◎先生の功績を言ふものは、大抵は、維新前の事を擧げるのであるが、吾輩の考へでは、むしろ、維新後に多くあると信じて居る。維新前の事は、赫々として人の目に燦らめいて居るが、維新後の事に至ては、まだ餘り顯はれないよふである

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

之れ一つには、顯はれないやふにして、處置せられたる故で、先生の寧しろ自から安んぜられる所であらふ。古人の所云ゆる大功無名の實例を先生に於て拜見した。吾輩の如き不肖なものに分り惡くいのは勿論であるが、中ごろより愕然として氣がつき、潛心注意して、其の處置の跡を吟味し、只だ但だ驚ろく斗りであつた。維新前の先生の地位を逆境と言ふのが通例であるが、全權局に當つて處置せられたのであるから、其の力量を施こすの途から言へば、寧ろ順境である。維新後三十二年間こそ、先生の逆境であらふ。此の逆境に居て裏面に經綸し、機鋒、功績を沒して、未發に大事を處置せられた苦心は、迚も維新前の比較でないと信じて居る。維新前の先生は知り易し、維新後の先生は、之よりして追々と知れて來るとと信じて居る。固より列舉する筈のものでない、自然に開展して顯はれて來るものであらふ。

◎誰か先生に信ぜられたか、何事か先生に重んぜられたかと言ふに、多分、何人と雖ども、先生に信ぜられたものもなく、又、何事も先生に面白がられたとはあるまい。如何なる人が來ても、信切に談して、夫々世話をされる。如何なる仕事で

六

も、相應の助力をされる。一合桝は一合、一升桝は一升桝相應に、夫々一パイの熱血を入れられて還るから、何人でも、先生に信ぜられたとも思ひ、其仕事が贊成されて居るとも思つたであらふ。夫はまたウソでも、方便でもないから、當人が左樣に思つて居るのは差支ないが、之で先生を推量るとは出來ぬ。西鄕先生に對してすら、海舟先生自己の關係は、餘程世人の想像と違つて居る。先づ、如何なる人物でも棄てらるるとは無つたが、亦、何人をも信用されると云ふとは無つたと云ふ方が事實に近いかと信じて居る。『惣て陳腐、陳腐、何も面白いとはない』と云ふ述懐を屢ば承はつたとがある。

◎帝室の御事に對して、先生の謹嚴誠忠なりしとは非常であつた。其の心掛の殊勝、其の操守の嚴重なとに至つて、驚歎したとが幾度もある。先生の持論では、德川氏は勤王をもつて立つたものと思つて居られたらしい。家康公はじめ、代々の將軍、代々の名臣が勤王の心掛を確信して少しも疑はれなかつた。先生の世界的の見識と宇宙包羅的の磊落との中から、『國躰』『お上』『聖恩』と云ふ謹嚴なる言葉を聞く毎に、悚然として寒心したとが幾度もある。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◎徳川氏の將軍に對しても、亦た此の風であつたが、殊に何日でも涙を浮めてお話しのあつたは、家定公の事である。

◎木村芥舟翁が先生の事を談されて、古人が謝玄を評し「吾嘗て其才を使ふを見るに、履屐の間未曾て其任を得ずんばあらず」の一句を引用されたは、先生の平生を盡すに此上ない知人の評と思はれる。此の細心あつて、而して大膽不敵で、如何なる事を爲ても生命を離れての仕打であつた。ソレデ、其用意が一々破格である故、殆んど尋常の解釋では分りかねることもあるが、つく〲と考へて見ると、如何にも、粹な、通人の仕打で、世の甘酸を嘗めつくしてからの處置である。斯くして、遂に、其の永眠に及ぶも、養子を定めず、伯爵勝家をして一旦、爵を失はしむるに至る迄、すべて非凡の用意と言はねば成らぬ。

◎以上は、毫も先生の人となりを評したる積りでない。評するとなどは出來ぬ、又、せぬつもりである。只だ、氷川に訪問するものが、何人でも皆な承知したる普通の事實であるから、事實を書いた迄で、其の事實が自然に先生を評するよふに見へるのは、寧ろ評でない、十目の見る所である。

女學

花園隨筆

古在紫琴女

◎家庭に於る父子の關係に就て

昔風の、嚴格なる、家庭に在りては。お父さまといふは、主人若くは、賓客として、敬ひ冊き。慈父として馴れ親しむとは、太く是を遠慮したるものなり。

さるは、無心なる小兒の、始より、是を知りたるにはあらねど。母君の、夫妻てふは、主從と、異名同義と思はる結果。御身先づ其摸範を示し給ひ、小供等にも亦しかせよとこそ、躾け玉ひしものなり。

されば、同じき家に住へるも、父と子といふは、名のみにて。父の居玉ふ其室へは、猥りに小供等の、入る事を許されず。もの申上るにも、三ッ指行儀の、敷居隔てゝ畏るのみ。たまたま此處へと仰せらるれば、服從的に進み出でゝ、つむり一ッ二ッ撫でらるゝ。夫れが何より、親愛の表現にてぞ

ありし。他は何事も、此格なり。

今より廿年の昔、我育ちける程には。さして大家といふにあらぬも、倜け珍しからぬ、遺習なりし。

今は夫れとは、事違ひ、父様母様の、膝を並べて、座り玉へば。小供達も、傍近く、戯れ語り春着などのねだり言。母様の夫れよりも、父様ぞ、おもりの上手と、慕はれ玉ふもあるほどにて。何處の家庭にも、温かき、春風の吹入りしは、おしなべての事實なり。

されど、もの皆中庸を、失ひ易き例に漏れず。規律なき、親愛の表現は、やがて不作法となり了り。子供達の傍にて、解語の花を評し玉ふがあり。闇の夜の、月見は、洋燈の下を限りて。輸贏沙汰の、夜更しに、子供を加へ玉ふもあり。そちも一盞参らぬかと、紅葉の手に、毒盛らせて、苦しと顰む其顔に、興がり玉ふ、父様もありとかや。

されば、此方面の弊を擧げてこそ、今の家庭病に、適中の頂剤ならめど。我は姑く昔に溯りて、嚴父とのみも、恐れみ冊く方の、弊を見むとは思ふなり。其は幾百年の痼疾の或家庭には、過度に變症したりと見えて。まとは、中流以上の天井裏に、今も潜める、膏肓の病なればなり。

つら〳〵思ふに、至孝の子の、多くは貧しき家に出る、是そも何の因縁ぞや。親として、夥しき恩賚あるべき家庭には、却て感恩の子を生まず。破れ垣根の、雪にも霜にも傷み勝なる、其所にぞ、心優しき若草は生ふるなる。さればこそ、古語にも、國亂れては、忠臣起り、家貧うしては、孝子顯はるといへり。

されど、國の亂れと、家の貧しきは、たま〳〵、忠と孝とを、顯はすの媒介たるに過ぎず。深く其源を探らむには、別に何等か、捉ふ可きもの、なからでやは。若しも、忠臣孝子なるものが、必要に迫られ、事躰に激せられてのみ出づべきものならば。其人を限りての、忠孝とは、なる可らむ。亂れたる世の臣は忠、貧しき家の子は、孝としも限る可きに。其必しも然らざるものあるは。素と〳〵内に蓄へし赤誠の、機會に觸て、忠孝の行を、派手やかにしたりと云に過ざればなり

されば、時の治亂と、家の貧富とに拘らず。深く忠孝の源を探らむには、只々至情てふ、唯一の心掛にぞ、あんなる。

是は古人の屢いひ玉へる事にて。至情の命する所、知らず知

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

らずと、其時々の、人道に合する、所以としあれば。基敎には、是を約めて、愛とはいふ。我今蕪雜の詞に、是を受賣するの要なきには、似たれど、是を家庭の裡に捉らへ來りて、父子の間に、親愛の情を發達せしめ置くの、如何に必要なるかを、辨ぜむと思へばなり。
人はいはむ、父子の情は、天授なり。故ら是が發達を謀らずとも事なりと。さあれ前にもいへるごとく、父子の隔り、甚遠き舊家風にては、父を親愛此上なきものとは知りながら、何とやら、遠慮らしく、懷き難き心地して、天眞の愛情を、ありのまゝに、發露することを許さず。かうしては、不禮とやならむ。あゝしては、不作法とや叱り玉はむかなどの父のさは思さぬ事までも、子の方より、遠慮の月日重なりては、繼子にあらぬ父子の中にも、一種の隔てといふもの、出來りて、人道を皷舞するに大切なる、愛情の發育を、妨ぐる事あるものなり。
此間に處して、巧みに、彼我の愛を結び付け、不作法にも流れず、疎きにも陷らず。天眞の愛を發揚して、しかも人目見苦しからぬほどの、權衡を保たせ置くには。母の注意を要する事にて、母なる人ぞ、父子の間の、生ける連鎖といふべきものなる。
此連鎖にして、心を用ひ、よしや外事に忙しき父の、朝夕席も温かならず。子女を膝に、接吻し玉ふ事も、稀なりとか。あるは恩愛の、情は内に燃えながらも、子供は一躰好かぬ質にて、子供好きの父御のごとく、我から好んで、膝近く、招き寄せ玉ふこと、少なきなどの事情より、子女の知らず〳〵も、父には遠ざかりて、母をのみ、親しきものに、思ひ誤るとありとも、よく〳〵其處をいひ聞せて、父は尊敬すべきと同時に、切々の情、彼方にも、斷つべからざるものあり、朝夕彼がごとく家を外に出玉ふも、行末の、そち達が爲にとて、しかくは苦勞し玉ふなりとか。其處は能きやう、子供にも、解るやうに、いひ聞せて、父は單に、惡戯を懲らすの、權力者たるのみならず、同時に恩愛し無比の慈父たりとの解釋を、與ふるやうにせでは叶はず。さるを世には、母なる人の、己が敎戒を以て、小供の惡戯を制し難き時など、さほどにもなき事に、それお父樣に告げ升よなど、一々に、父の名を引出して、漸く泣きを止むなど、事躰は甚輕きやうにて、其結果

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

は、其都度自己の責目輕きを、自ら示すのみならず、父を一家の、警察官が何ぞのやうに、只々畏怖すべきものと、誤解せしむるにも、立到るなり。其外擧げていはゞ、尚ほあるべけれど、一々はいはず。兎も角母は、父と子の間に於る、恩愛の傳達者として、輕からぬ、責ある事なり。とはいふもの、偶は是畢竟人を射むとて、馬を射たりしものなるのみ。假令ば母の、其間に立ち、如何に心を砕けりとも、父なる人の、舊慣に泥みて、妻子との、雜居を喜ばず。恩愛の情は内に燃えながらも、外は、却て冷淡を裝ふを以て、男子の面目とし玉ふ事などあらむには。折角母が心しての、愛の連鎖も、其甲斐なく、形の外に、情を探らむ、智恵ある筈なき、小供には、母の詞も、虚言かとぞ、小さき胸には畫かれて、父は我に疎々しきものとしも、思ひ成りぬべし。されば父なる人も亦自ら心して、假令身は、中流以上に位せりとも、主公たるの、舊慣を捨て、責ては、晩餐だけなり共、子女と食卓を一ッにし、往昔の外、則に、親子團欒てふ、物質外の、一味を加へられたきものなり。其他　暇あるをり〳〵には、爐邊に、家庭の教師となり、花園には、遊び友達ともなるなど、力めて、子女の心を措ぬ、工夫をせられたきものなり。さるを我國にては、主に、武士氣質の遺習として、武士ならざりし人迄も、中流以上の家庭といへば、子女を膝にするとを、恥ぢたるの餘習失せず。花も月も、妻子を連れては、何とやら、貧乏臭く、野暮らしく、紳士殿様らしからず。子供は、そちが連れて行け。乃公は獨りが、男子の、品位を保つに都合よしと、兎角は惜からぬ、妻子を家に、獨遊を試み玉ふが、往々あり。斯くの如きは、彼汚はしき原因より、妻子を疎み、外すとは遊ひて、則に咎め立すべきの事には、あらねど、彼父子の間に、愛情の、切なるものを、發達せしめ置むとするには、尠からぬ、傷害を來す事なり。

何事も、此風にて育ちし子なればこそ。中流以上の子女といへば、相當の教育を受くるに遺憾なく、一廉道義を辨へし筈の人の、往々にして、不順の子なるがあり。良し否らずとても、今一際、孝子とは、謂へ難きが多かるは、爭でか、家の富み榮え、孝子たるの、心機を動かす、便宜を缺けるに依るべけむ。貧には貧の孝行あり、富には、富の孝行あり。よしや名に顯はれたる孝子に、貧の事歴が多ければとて、衣食を擲げまつ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

は早く幼時に萌して、孝とは知らぬ孝念の、次第に養成せられつゝも、一度機會の觸るゝあれば、思はずも、大孝の心を、轟かす事あるものなり。

さはいへ、素とこれ、情の世界の仕事にて、智識の上には、倫理の命ずるものあるなく、禮法の、約束する所なきものにしあれば、斯くして愛情の完全に、發達したるものにありては、天眞爛漫たる、純孝子をも出せる代り、若し不幸にして、愛情の、發達を妨げらるゝ媒介の他にあるあり、身は窮巷の、矮屋に、父子膝を集むるも、情は中流以上の如く、父子の間、疎々しきものあらむには、智識世界の人間に於ては、到底見る可らざるほどの、大不孝ものを生ずるとあるも、數の免れざる所なり。

さあれ、智識世界の人間に、孝子尠き例に比せば、必しも無智より生ずる、不孝ものを、多しとはいふ可らず。寧ろ無智の、有情者に於て、至孝を出す、多きに比しては、智惠あるものに、比較的、至孝の子尠きを、恥ちねば、ならぬ譯ならずや。

以上説明したるが如く。人は、有智と、無智に拘らず、眞の

るの外、親を慰め、安んず可き途の、精神界になからでやは。

然るに、親の、衣食に事缺き玉はぬを以て、孝を行ふ不便とし、理性に於ては、孝道の、何ものたる乎を、辨知しながら、身は生涯、親に對する、至情を發揮するとなくて止んぬるが多き、是爭でか、倫理教科書、當を得ざるの罪ならむ。況して一世の風教弛廢など、漠然たる名の下に、文字ある輩の、不孝てふ名を避くるを得む。詮する所は、親に對する、愛情の、充分に、發達し居らぬよりの事なり。

是に引替へ、貧しき家の、居間を隔つる餘裕なく。寢るにも、食ふにも、一ツ所に集まりて、其日稼ぎの、收入を、妻が米にと、走りゆく、夜食の準備調ふ迄は、大の男の、勞れし身を、曲げても、子女の對手となりつ。襁褓も替へれば、鼻汁もかむ。懷中の包みものは、且しや一錢が菓子とても、父が慈愛を味ふ子の、口には、珍味と、拜まれ可く、虫氣といへば、夫れ灸だと、男の脚の、達者に任せて、三里五里を、負ふても行くといふ風に、獻身の愛を、具象的に、發表する、機會多きものなれば、子の方に於ても、稚き記憶に、父の慈愛、身に染み〳〵と有難く、何でもちやんに樂させねばの、心

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

孝念といふものは、愛情勃々、禁じ難きの至情を俟て、始めて活動するものなる以上、始めより、育兒の際に於て、深くも茲に意を留め、力めて父子の間の愛情を、完全に發達せしむ可く。且は双方より遺憾なく、愛情を、發表するの習慣を、付け置かねばならぬ事なり。彼古風に泥みて、虚禮を重んじ、たゞ〳〵父子の愛情に、疎隔を來すものゝ如きは、可愛の子をして、知らず〳〵も、不孝ものに、陷らしむるの媒介たらん。若し幸に、智育の効により、不孝ものを生ぜずとも、情育缺けたる家庭よりは、絶て至孝の子を、出す可らず。よし又假りに、道義心の、堅固なる子女のあるあり、情はさして切迫せざるも、義に於て孝を行ふとせば、是僞善なり、僞孝なり。爭でか、情義双ながら完く、孝を忘れて、孝を行ふ、眞孝子に比すべけむ。況して、義の爲に、動くものは、苦痛を忘れず、情の爲に、動くものは、愉快禁じ難きの、得失あるをや。顧ふは、世の父君、母堂の、深くも是に意を留めて。家庭に於る情育を、まづは、親子の手近くて、しかも大切なる側より始め玉はむを。是畄に、親の爲め、子の爲に、大切なる條件なるのみならず。凡ての愛の淵源たるべき、親子の愛の不

發達は、万人に對する愛の不發達となり、人道至重の一に缺くるは、すべての人道に、背反するの因なればなり。

終りに臨んで一言せむ。茲に故ら、父をのみ擧げたるは、母を無視せるものにはあらず。只々上下の家庭を通じて、父の愛は、具象的に、子の前に、發表する、機會少なきのみならず。且は是を形に顯はさぬを以て、男子の面目とせる、習慣に反し、母の方は否らず、そも分娩の始より、我身の愛を、具象的に、顯はすなど、自然が命ずる便宜あり。何事も、是に準じ、格別の上流社會を除くの外は、子との關係頻繁にて、母の愛は、具象的たる、性質を帶び來るを以て、子との關係、疎からむとして、疎きを得ず。從て形の外には、何ものをも、認め難き小兒の頭腦に、早くも母の、愛の影は印せられて、生涯温かき懷を、忘るゝ能はざるにも至り易きなり。故に我は、父母個々の性格と、生活の狀況如何より、來る可き例外は問はず、姑く其弊の普遍なるべき、父の方を擧げたるのみ。看者諒し玉へといふ。

他人の善悪

人の善悪いふほどの人に、身の修まりたるが稀なるは、今昔の常例なり。涙なく、同情なき批難は、たま〳〵其當人の前に、直言として、呈出せらるゝとあるも、割合に、効能なきものなり。況して陰口などいふ悪徳を、己れ先づ侵しつゝも、口の端拭ひて、人の善悪いふは、彼をして、益〳〵悪に陥らしめむとにや。若し善に移らしめむとての事ならば、其は甚覺束なき方法なり人の悪を聞きては、忽ちに、獸の如く、忌み嫌ひ、人の善を聞きては、忽ちに、神かとぞ崇拜する、其は餘りに、單純なる、兒戯にしも類せずや。

人間は、本來如何なるものぞ、神にも非ず、獸にも非ず。人なるが故に人ならずや。既に人なり、さらば人の中に、獸の混れる筈もなく。神の、天降りませる理由もなし。人を人として、觀察せむに、何の差別をか、絶對には立て得べき。

動物進化説可なり、神性墮落説可なり。個は何れも、人間の半面を、遺憾なく、説明したるものなればなり我は此絶對に、矛盾せる、二説の何れにも、左袒するものなり。二説を合して、一とせるもの、是我今の、人間觀ともいふべき者なり。肉に於ては、動物の、假令ば進化にあらぬ迄も、同種屬のものたるを認む。靈に於ては、神性の、よしや具足せぬ迄も、確に神氣を、享受したりしものなるを認む。神と、獸と、永久に、調和すまじき二端を捉らへて、調和の運を試みられたる、是人間の、天命には非る乎。

其は兎も角人間は、肉に就けば動物たり。靈に就けば、神靈たり得可き、二面を有せるものなればこそ。其二者、隱現の度合如何により、茲に人格の高下を生じ、茲に善悪の兩影を、顯はせるものたるに過ぎず。換言すれば、靈の人として、肉を征服するの勝利者たらむ乎。肉の人として、靈を沒了するの、失敗者たらむかとの問題なり。而して此問題に對し、最後の決答を、與ふ可きかを何日ぞといへば、其は無論冷やかなる、地の底に葬られて、靈肉の全く、分離したる時ならざる可らず。其は活動間斷なき人間の、今日の失敗者は、明日の勝利者となり。明日の勝利者は、以後の失敗者たらざるを、保し難きの變化あればなり。

さるを、未だ人生の行路中、戰鬪を終へざるの戰士女を目して、姑く靈肉何れかの、勝敗者と、假定の、評を下すは猶且可なり。自他共に、人間の、兩面あるものなるを忘れて、先

天的に、靈性と、動物性とを、偏有せるものなるかの如く誤想し、未來迄をも、速斷するに至りては、洵に淺見の極みなり。

斯の如き人々の、人を評する言を聞くに、過信に失せざれば、過疑に流る。忽ちにして褒め、忽ちにして譏るは、さながら片々たる浮草の、浪に任せてうねるが如し。是人間といふもの、眞相に、一定の見解を下し僻ざるよりの事なり。

況してや人生の行路には、平坦なるあり、崎嶇たるあり。さるを、おのれ平坦なる行路に處して、纔に跪かざりしを以て、是を境遇の賜ものとはせず。戰はぬ身を、さながら戰勝者の如くに立ち振舞ひ他の崎嶇たる行路に、行き惱めるものを貶しむるに至りては、其無邪氣は、愛す可く、其幼稚は、寧ろ氣の毒の至りならずや。

恩惠の記憶

恩を知りたるものは尠し。恩を施して、是を忘るゝほどの人は、一層尠し。俟つ所ありて、記憶するなはさらにわるし、人を恩知らずと罵しるものは、割合に、恩を施したる事尠きものなり。受けたるものは、忘れ易く、施したるものは、忘れ難きにぞ、世は情に始まりて、爭ひには終るなり。とても角ても、うたての世や。

上眞行氏の音樂談

青柳有美記

The man that has no music in himself,
Nor is not moved with concord of sweet sounds,
Is fit for treasons stratagems and spoils.

シエーカスピヤ

一幅の掛けもの、一幅は、高く雲にうち乘れる觀世音の畫像で、一幅は、秋月半ばその姿を隱くせる小軸である、この飾り少なく寂しげに見ゆる一室は、雅樂の緣故に便せんさてか、床を拔いて、板敷に直ぐ疊表を展べたものだ。その小さきオルガンを室の片方に据えて、天井を高くすることは世の常の如くならねば、歐州の便を計ツたものだらふ。これが、音樂學校の首腦で宮中の伶人樂師たる上眞行氏牛込草庵の客室である。よく主人が超俗の心を察すさいへばいふものゝ、亦涙の出でぬでもない。然し、奇しきモツアートやベートーフエンの住家なども此かりしやなど思へば、難有く思はれる。主人なる樂師の君は、一見、昔のバプテスマの約翰の、駱駝の毛衣に皮の帶をつかれたるを想ひ出す程で、樂堂などに遥に拜するより、一層さ超俗の風が顯はれて、殆んさ羽化せる仙人の如く思はれる。君も亦一種狷介の奇人であらふ。小さき金の火入れを膝の上に抱へながら、その鋭き神經を刺戟せぬ用意にもさか、參湯を啜りつゝ問にまかせて語り出でられたるところは、まづ大畧下の如くだ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◉國は矢張り京都でして……東京に參ったのは、極ズット早く……左様、明治八年の頃で……ハイ……

◉洋樂を始めて宮中にお入れになッたのは……矢張り、これも明治八年の頃からで……外國の賓客などが見えられた時に、洋樂がないと、不都合だといふので……あの……バンド――樂隊で御座りますな――あれをやりましたので……然しバンドは御承知の通り、室内の樂でありませんからして……丁度明治十二年の頃でした……室内に適する管絃樂をやッて見たらどうかといふ考になりまして……それから更に伶雅樂部の有志のもの丈けが寄ッて、音樂協會といふものを組織し……この人は今でも宮内省に居られまするが……海軍省でも明治八年頃から軍樂隊をやッて、そのために當時英吉利から來て居られたエッケルトといふ人は、絃の方も少しはやるといふので、その人に教務の餘暇に教練を依賴することになりましたところがサア始めるとなると樂器がないといふ騷ぎで……漸く五つ六つ集めて……たしか其時は……ヴアヰオリンを始めだと覺えて居りまする。其後音樂取調掛が出來てあのメーソン氏が來られ、十三年の頃でした……取調掛の人々と共に、一日私共の演奏會を見るに參られましたが……その會の後で通辯をして居られた方の紹介でメーソン氏に近づきになりまして……段々教練のことを賴みまするといふと、大變に悅ばれて、一躰、何處の邦にも土着の音樂者といふものがある、此度自分で日本に來るに就ては、その土着の音樂者が必ず邪魔をするだらふと思ふて、窃に決心をして來たのに、諸君が自分に就て學びたいといふのは、實に意外で、感心である』と言はれ、快く承諾せられました。かく一方にはエッケルト氏あり一方にはメーソン氏あり、翌十四年に始て本願寺の書院を借り、其成績を發表する會を開くことになり……非常の盛會で……なんでも、單調子ではいかんといふので、田口氏などにも、演說をしてもらい……そのうち私共が據金をして外國から買ひました樂器が若致し――これが段々いッそのこと、宮内省で引受けたらよからうといふ相談になり、遂に宮内省に引繼がれる樣になつた次第で……それからズウット今日までやッて來て居りますので……

◉公式の時に、宮中では一切洋樂を用ひませんで、皆な古い雅樂を用ひられます。紀元節の御宴の時で御座りまするが……あの時間は御宴と申しても、極く短いもので僅か卅分位でありますから……その間には御承知の『久米舞』と申して、神武天皇東征の時のことを仕組んだものを舞ふたけで……これが紀元節を設けられてから以來の例になッて居ります。洋樂は唯々吹奏樂のバンドの方を、天長節にやるだけになッて、其他は外國の賓客でも見えた時の外は、少しも公式には致しません。つまりそれですから、管絃樂はたゞ宮中の樂人が稽古をして居るといふに止るのみで……

◉私共の意見では……日本古來の管とバンドに用ふる管とは吹く口の構造が丸で違ッて風の入れ方が非常に違ッてきて居りますから、兩方をやらふといふは、無理で……で……一方に、口は雅樂の方でならして、指は絃の方で使ッて、西洋樂は換絃樂だけにしたら、善からふと思ッて居りまするが……今のところでは、重に吹奏樂の方で、管絃樂二分に吹奏樂八分といふ樣な割合になッて……それにエッケルトといふ人は元來バンドの方の人だものですから……同氏の宮内省に這入られたのは、漸く……たしか廿年頃からだと存じて居りまする。

◉笙は日本古來の樂器のうちで、器械的には一番よく發達したものでありまするが……これが印度に渡ッて其れから西洋のオルガンの原になッたと申す人のある程で、大變オルガンに似て……誰でも押さへて吹きさへすれば……下手と上手は無論ありますが……音の出るもので……然し篳篥や笛になりますと、仲々容易な本當の音が孔から出にくく、一人前に吹く樣には……丁度西洋のヴアヰオリンといつた譯で半年や一年ではとてもなれません。宮中の樂人は、この雅樂をしッかり本職にやらねばならず、吹奏樂もするし、その上、管絃樂の稽古も致さねばなりませんから……つまり三つで……餘程骨が折れますし……實に大變です。

◉雅樂は凡て皆な記憶に訴へて、樂譜は少しも用ひません……極小さな時分から親は之を子に仕込むといふ具合ひでゆきますから……

◉ワグネルは、近頃歐洲や亞米利加で大に歡迎へらるゝといふお話ですが……それは、なる程そふあるべき筈で、……然し氏があの……傑作なる碓かタンハイゼルか何かを演奏するために、パリに行ッた時には、英吉利から態々聽きに來

たらのも隨分澤山あつたそうですが……皆な聽て當時は惡く言つたとのことで……でも……段々解つて來ましたらふ。

◉日本人に、西洋の音程をそのまゝ當てはめて行くことは……なる程……そこらが餘程研究を要するところだと思はれます。一体日本人は、……小學校の生徒などの歌ふのを聽きましても……陰陽の別れ目で至極大切である第三音が……どうも低い樣で……餘程訓練を加へなければ、本當の音は出ません。それのみならずすべて音階の極高いところと極低いところも久出ない樣で……つまり上下共不足なので……

◉外山博士は……餘程前に少し妙なことで暫く一緒にやりましたことがあるので覺えて居りますが……あれでも、一人でテノルの高いところからベースの低いところまで出る仲々嚴い聲を持て居られます。隨分幅の廣い聲で……今はどうか存じませんが、その頃は……

◉器樂の演奏などを聽くときには……なる程……眼でその演奏者の動作を觀て感覺を深くするといふこともありましやうが……サア、聽く人の習慣も亦ないでもありますまいが……音樂で笛などを吹て居りますると……本には眠つてはいかぬと書いてはありますが……皆な自然に眼を眠つて參ります。デートリッヒといふ人なども、ヴァイオリンを弾て弓をこすつて居る時には、丸で眼の方は……まさか本當に眠つて居るといふでもありますまいが……瞑ぐ樣になる樣でした。矢張り耳の方にばかり一心を注ぐがよい樣で……眼の方はかふ眠らして……

◉奈良の正倉院の御物のうちには……私も一度拜見致しましたが……笙のこんなに——三尺も——太いものがありまするで……これはあの竽といふものだらふと思はれますが……それから……こふ／＼こふ……段々少しつゝ長けがつまつて短いのでこんなもの——一尺五寸位で、大小色々のがあります。その大いのを近頃摸造した人がありまして、吹きますとベースの極低い音が出ます。この色々のを皆な合はしてやつたら、隨分しばらしいものだッたらふと思はれまする。その外正倉院には、笛なども色々澤山ありまするが、皆極簡單なもので、唯竹に孔をあけたといふだけに止るんで。……ハイ……笛は横のも縦ののも兩方あります。

◉奈良朝前後には、御承知の通りあの遣唐使などゝ一緒に、隋唐の方に音樂を研究に行つた留學生なども隨分澤山あり……これが歸て來て和聲の復雜なものを、其儘やッて聽かしても、仲々一般にはわからなかッたと見えて、あちらの方や百濟から傳つたものを、餘程日本風に改め、和聲は凡て三つ宛則ち三部に簡畧して、管も三つ……絃も三つで三絃……三管三絃三鼓といふ樣にしたらしく思はれまする。

◉今のところでは、先づ……なまぢかに手を入れまするよりは、西洋のものを其儘やッた方が安全で●まッと作曲をやる人がドシ／＼出てくる樣にならなければ何もかも出來ますまい……左樣……天才でなければ……。假令へば高いところは歌へぬからと言ッて、一段に下げますと、今度は低いところが歌へなくなり、低いところが歌へぬからといッて、高くすれば、今度は高いところが歌へなくなるといふ譯で……どふしても天才の作曲者を待つより外は仕方がないので……：追々段々出て參りましよふ。

◉私共の様に老なさりますと……作曲はとても……もう駄目で……頭が丸で枯れてしまッてますから、仲々うまいものは出ませぬ……どうも作曲は若い時に限ります樣で……流れて來ますから。天才といふものは妙なもので……幸田の妹さんなんかの作るのでも……曲は極つまらん簡單な短いものですが……餘所の人の作るものとは、流れの具合がすッかり違ッて、仲々餘程面白いのを書かれます。

◉音樂學校などでは……サア合唱をやるとなると、人を集めるだけでも……内幕のお話をすれば、仲々大變で……駿河臺のニコライ會堂などでは、兒に角聖堂附きの詠隊といふのが幾人か常にちやんと備へてあつて、それに練習を長く同じとこに積れて居られますから……ところが私共の方になりますと……せめて一つのものを一級で歌へる樣だと誠によい都合ですが、仲々そううまくはゆかず、何年級からでもかまわず少し歌へそうなものは、皆なつれ來り、卒業生もそこらに居るものは皆な狩り集めてきて、漸く五六十人を揃へて……まア歌ふといふ仕末でして……せめて五十人だけ、ちやんと歌へるものが、何時でも學校

らあるさいふ具合ならば、都合よくありますが……兎に角、人數の不足なのに一番困りますんで……。神田の分校の方からは、之から却て良くやる人が出るでしよふ。皆な本當に音樂をやらふさいふ人ばかりで……それ〲本業があッて、音樂はほんさふの粋輿にやらふさいふんですから……

◉日本人の好みにむく曲は……サア……始め誰れでも英吉利風のもの……殊に蘇格士蘭土風の……所謂スコッチユ、ソングさいふ……第一音から急に第六音に飛ぶ樣なスコッチユ、ソングを好みますが……獨逸の作者に手をつけますさ……少し出過ぎた樣なことを申し上げますが……實際英吉利風のものは、見るのが厭やになッて參ります。メンデルソンは、あアいふ方ですから、素より何處にでも向きましよふが、シユウマン……シユウベルドなんかになりますさ、仲々複雜で解りにくく……變化は殆んさ極りないさいふ位で……一昨年なくなられたブラムスなんかになるさ、一層複雜で容易に解することが六ケしく……ベートーフエンのものは、皆な簡單て、拘泥した所がなく……つまり自然で大いのです。

◉『讀賣』の『神樹生』さいふ榊さんは、高等中學なんかに居ッた時は、閑さへあればヴアヰオリンを彈て居る人で、仲々自己流で規則などには拘ひませんが、却て自然で面白く……仲々うまく彈かれます……。あなたも音樂の方は何か……

……

◉『ん』さ言ふ音は、西洋人は極嫌いで、なるべく響かせぬ樣にくさ、たゞ申譯ばかりに……あさで一寸さ響かせて殆んさタイムを與へません……また可成この音は使はぬ樣にして居る樣で……私共の教はりますさきには、何んでも次の言葉に遷る時、一寸あるかなしに響かせよさ言はれたもので、假令ばムーンの『ン』なんか……然し日本では妙に……雅樂の方にも流行唄なぞの方にもこの『ん』さいふ音を大變に好んで用ひてある樣で……

◉今の樣に文學學者と音樂者さが、全く分れて居ッては困りまする……文學者も少し音樂のことが解るし、音樂者も文學のことが解る樣にならなければ……鳥居さんは其の歌の善惡は兎も角さ致しまして……少し音樂の方もやッて居られますから……よくあてはまる樣で……外の方になりますさ、唯こちらから出した字数に句を入れるさいふに止る位ですから……文學者の方でもお困りでしよふ——束縛せられて

◉ハイドンは英吉利に行ッた時、ヘンデルの有名なるメサイヤの曲を聽て感奮したそうで、それから三年一生懸命で勉強し、あの大家になり上げたさのことで……何れも曲は皆な……同樣……神さびた方です。

◉露西亞の音樂は……既に幸田子なども度々演奏せらるゝ程で……仲々進歩して……。長く露西亞に行ッて居られ、今駿河臺の方に敎て居らるゝ高須さ申人から、色々曲を借りて見ましたが……。一躰單音階の多い國は進歩しないんで重音階の方が多い國は進歩したんださいふことをよく言ひますが……露西亞の國には、ごふしたものか、單音階に屬するものゝ方が多い樣で……矢張り國柄に似て何さなく陰氣に思はれます。

◉アクセントのことも、色々故障があるものですから……先だッても武島羽衣さいふ人に、一つ作歌を賴みまする際、そのことを話して、曲のアクセントさ歌のアクセントを合はせる樣に氣を付けてくれることを願ひましたが、何さも仕方がないさいふ話で……日本のアクセントは御承知の通りなものですから……國語制定の上ででもないさ六ケしいことでしよふ……羽衣さいふ人も矢張りそれまでは仕用がないさいふので……西洋のものになるさそんなことは少もなく、よく曲のアクセントさ言葉のアクセントさは衝突しないで……甚しいのになるさ一音毎に、その上に發相の印がついて居る位です。日本語ではさても、そんなことにゆけません。それに……國語調査會躰は……御承知の通……議會でも削らるゝさいふ仕末ですし……

◉まだ、御ゆッくりなすッて……提燈を差上げましよふ……お待ちになッて……

* * * * * * * * * * *

其夜、眠りにつけば、白頭の仙人、夢に我が枕頭に來りて作曲の術を授けて歸つた。それから今では何さなく、自分も曲を作ることの出來る樣な信仰がある。難有いことだ。

近松女氣質

櫻井鷗村

（其一）序論

詩人ポープ謂ひけらく、『女は、畢竟一の矛盾なり、』と。實にや矛盾ありて辨へ難きものは、女性の心情なる。其胸三寸、割て見れば、奈何の現象をか呈す、佛家の、彼を貶して、地獄の底に擲つは非乎、歐米詩人の、彼を崇めて、天堂、最高の座に奉ずるは是乎。古來、誰か女性の性情を解剖して、其幽微に通じたりや。

女心は、知り得がたきものなり。男は殊に之を知らず。知らざるが故に、往々大事を過つ。高が女と見くびつてかゝる男のやからは、遂には女より、男がなんのと手玉に取られ、國政を紊し、家事を破り、一身を損ふ。女は鳩の如く温和に、蛇の如くに智慧あるに似たり、されば、男が、一ッぱし、女といふものを知つた顔に、之を欺す積りにても、後には却て欺かるゝことあり。かくも辨へ難かる女心は果して如何なるものぞ。世上の女人、もとこれ同型の者に非ず、彼此皆、其性癖を異にす。然りと雖も、其異りや、男性の如くに甚しからず。男性の型には、異材あるべし、女性の型は、凡百のやから、殆ど同材を以て成る。其材とは何ぞ、情愛これなり。バイロンが歌ふを聞けば、『愛情は男子に取りては、生命の一部分に過ぎず、女子に於ては、其全躰を成す』といはずや。女子は情愛を以て身となし心とす。されば彼が、一生間閲歴の大事は、殆ど皆、此より來るの變化なりとす。彼の天地は、この一小區域なるを以ての故に、『移り氣よ、汝は女と名く』と沙翁のハムレット公子が絶叫せる如くに、其心の定まらざる時は浮草の今日はこちらの岸に咲くの狀あれども、若し動かざる時となれば、磐石の如くにして、近松の曰ひける如く『女は我一向きに思ひかへしのならぬ者』となる。此變態あるは、即ち情の本色に非ずや。されば吾人はハムレットの語を改めいはんか、『情よ、汝は女と名く』と。

情は必ずしも賢なるものに非ず。女の國を傾け、城を傾くるは、計術を以て成るに非ず、褒似の一笑を愛めるは、周の社稷を危からしめんとの下心ありしには非ず。女、情に安んぜば、身を完うし、人を益し、之に反すれば、他を害し、已を

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

傷る。處女は、情愛の温め方一つによりて、悪魔とも天使とも孵化すべき、奇跡の卵子なり。

男子實に女性を知らずんばあらず、これ一身、一家、一國の大事なり。吾人の意常に、之を明々にする存す、而して多年の論議、未だ、世の爲に之を盡くすと能はず。今たゞ爰に、暫く抽象の説辯をさし措いて、例を、近松門左が世話浄瑠璃に描きたる、幾多の女性に假りて、情の移動即ち身の變化たる狀態を推考せん。

ラスキン、沙翁の戯曲を許して云へるとあり、曰く『我、敢ていはん、沙翁には、男主人公無くして、女主人公あり。』と。沙翁すらなほ且つ然りとすれば巣林子に於て更に然らずんばあらず。彼の時代浄瑠璃は、其天才の本色に非らざれば問はず、其世話浄瑠璃中の立者は、比々皆女性ならざるは無く、之を描くに、最も其妙を得たり、彼の男性は、彼といひ、此といひ、特性の認むべきものあるなく、累々として、柔弱なる大坂男子なり。たゞ壽の門松の難與平其他一二の性格のや、認むべきありと雖も、畢竟、彼の男性は、皆女性のお相手に、連れ來りたる賓客のみ。

然るに又其女性なるものも、其男性と等しく、異格に乏しくして、類格多きを見る。沙翁の男女の雜駁多種なるの比に非ず。たゞ巣林子の女性を描くに長じたりとする所以は、幾多の方面を捉へて、よく情致の微を穿ちたるにあり。而して、彼の女性は、狹斜の人に非ずんば、多くは狹斜的人物なり。其世話浄瑠璃三十二種（卯月の潤色を除く）の主人公及副主人公たる女性の境遇を類別すれば、實に左の如し。

○素人

伯母某（浪人妹）	（長町女腹切）
お夏（但馬一の米問屋の娘）	（五十年忌歌念佛）
おさん（京都大經師の妻、商人の娘）	（戀八卦柱暦）
お種（因幡の一藩士の妻、同武家の娘）	（堀川波の鼓）
お龜（大坂古道具屋の娘）	（卯月の紅葉）
お梅（高野山下商人の娘）	（心中萬年草）
おきさ（大坂新物屋の針女、三田の百姓の娘）	（今宮心中）
おさゐ（雲州侍の妻、同階級者の娘）	（鎗權三重帷子）
おさん（大阪紙問屋の妻、商人の娘）	（天の網島）
お吉（大坂油屋の妻）	（女殺油地獄）
お千代（大坂八百屋の妻、山城上田家族の娘）	（宵庚申）
おまん（但馬一藩の大坂留守居の娘）	（薩摩歌）

〆十二人

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

○黒人

お花（京都四條の女郎）	（長町女腹切）
吾妻（大坂新町の女郎）	（淀鯉出世瀧徳）
お初（大坂蜆川の女郎）	（曾根崎心中）
お房（大阪南新地女郎）	（重井筒）
お島（大阪蜆川の女郎）	（心中二枚絵草紙）
小まん（東海道の関の宿場女郎）	（丹波與作）
小かん（大坂蜆川の女郎）	（心中刃は氷の朔日）
夕ぎり（新町女郎）	（夕霧阿波鳴渡）
梅川（同）	（冥途の飛脚）
お嵯峨（同）	（生玉心中）
吾妻（新町女郎）	（壽の門松）
小女郎（博多の女郎）	（博多小女郎浪枕）
小春（南新地の女郎）	（天の網島）

〆十三人

数に於ては、素人、黒人、殆ど相半し、なほ戯曲中に、許多の女性を合すれば、彼には黒人よりも素人の女性多しと雖も、其特に戯曲の筆を用ゐたるものは、素人と雖も、なほ黒人に近き性格を有するものたり。傾城風をするお夏、當世女の仇なるおさん、踊に名とりの溜者お種、仇な年増の流石素人の果たるおさゐ、子持ちとは見へも盛りのお吉など、其他お亀・お梅、おまんの類、みな其地位を轉ずれば、京、大坂の色町に仇者たるべきものなり。お種、お夏の如き國者もなほ、都の花車な育ちの女性を見る目を以て寫されたり。所謂玄みな女の性格をよく描きたるは尠くたゞ天の網島のおさん、宵庚申のお千代などあるのみ。

由來、巣林子の文壇に馳驅せし時代は、元祿前後の、世は偃武の太平に慣れ、淫靡滔々、風をなし、男子にして、遊女に接せざるものなく、固氣な女も、男の氣心を收めんが爲に、お山らしき風習をなしたる多かりしと覺しく、殊に風俗下れる大坂を以て、戯曲の舞臺となしたるを以て、彼の女姓の此如くなるは當然なり。而もまた巣林子にして、最も能く情を穿ち得たるものは、狹斜の女性なりしなるべく、自由なる男女交際は、たゞ獨り、中第絃歌湧くの間にのみ存せし當年に於て、何人かよく、遊女輩以外の女情に深く立ち入るを得んや。

然りと然も、其素人の女性の狹斜的なる擧動、性癖あるが中にも、なほ黒人を區別せらるゝものあり。遊女等、旦に呉客を送り、夕邊越客を迎ふる中に、性情自然スレテ、意地、張り、といふもの、戀愛の領分に侵入す、昔の遊女は特に、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

此情癖に富みたりといふ。此意地、張りは、實に黑人に於て其發達するを見るべく、こゝに、素人と異なるの性を成すものあり。近松の女性を研究せんとするに當りては、此意地、張りの何物たるかを知るに非ずんば、觀察往々肯綮を逸するとあり。之を知るは、狹斜出入の閲歴を有するものゝ能くする處にして、吾人の能はざる處なり。然りと雖も、彼等黑人も、意地、張りの奥には、依然純乎たる情愛の燃え立つものありて、彼等は、なほ之によりて、身命を左右せられつゝあり。其赤心の底を叩けば、彼等も亦たゞの女なり、女として、情の天地間に生息するものなり。然らば、能く普通の女性を觀るの見識を以てせば、彼等豈に知り難からんや。たゞ吾人の及ばざるを恐る。

乞ふ、是より吾人をして、近松の女性中、其重なるものに就きて女子の情性を觀せしめよ。

▲女學雜誌　發刊毎に最も有益にして清潔に清潔にして趣味多き記事に富めるは此誌なり而して又此號中には「新正一轉の心」のごとき堂々の文字と「音讀の弊害」のごとき親切懇到の文字と「怪しき流憫」のごとき怪しく床しくあはれなる文字とを併せ見んとは幾時もながらうれしき誌なるかな

（若越新聞、二月十六日）

評論

村翁時勢談

一日數客あり、連りに時務を問はる。偶然卒答する所の事、大抵感興の餘波に過ねど、別に人ありて其の大梗を筆記したるを見、試みに少しく增補して左に掲ぐ、

問　議會の前途は、つまり如何なるものでせう乎、

何如なるのだか誰にも分りやしません、分らないように出來てるのですから。元來、之と云ふ土臺のあることではなし、ホンノ流行で出來たものですから、ツマリ流行だと思つて居れば善いのでせうよ。

問　流行とはドウ云ふことです。

西洋の眞似です。西洋は、國躰が違ひますから、人民が政府に對する考は餘程違つたものです。稅を出す以上は、自分等の考を聞いて貰はねば成らぬと云ふ催促から、ツマリ、議會が出來たので、元と止むを得ぬ所から起つたのです。ナニモ

之が最上の政躰だと云ふ理想から來たのではありますまい。夫を最上と思つて、何でも、文明の政治は之に限ると思つたのが、日本人の眞似です。

問　ソウ言へばツマラナイヿです乎。

ツマラナイ事はありません、物の進歩は眞似から來るヿも多いので、子供などの發達は、丸るで眞似です。然し、大人や國家の見識では、タヾ眞似斗りではツマリマセン。一躰、人物の種類を言ふと、眞似る人と、反動する人と、悟つて居て眞似る人と、コウ三つあります。日本の文明はいつでも、眞似で、此の眞似に反動して、國家主義などと云ふものが起るのです。朝鮮、天竺、支那、オランダと、順々に眞似た工合を御覧なさい。夫から、之に反動して日本主義のよふなものの起つた道すじは、古今同一徹です。此の二つはドウセ何日でもあるものですから、無くなる氣遣もなし、又、憂ふるにも歎くにも足りないヿですが、もし第三種の卓然たる人物が無ければ、國歩は艱難に陥いる筈でせう。盲目で、國が歩むのですから、ツマヅク譯でせう。

問　夫ならば、議會の事にして見まして、どうすれば善いのです。

どふもしないのです、あまり氣を留めないで、ウツチヤツて置けば善いのです。西洋だつて、議會で大事をするのではありますまい、議會で八釜しやを制して置く丈です。洋行した人が、色々精かな視察を言ひますが、夫は表面の事で、國家がソンナ事で治まる筈がありません。大事と云ふものは、人の知らぬ間に決すべきもので、古しから樞機に預かるものはソウ多くありません、あれば破れる丈です。三百人、四百人の相談で、事が出來るなど〻思ふのが、抑そもの間違ひです。然し、何れの世にも八釜しやがあつて、騒々しいものですから、之を鎮めて安心させる爲に種々の道具が入ます。西洋では即はち議會が其の器械になつてるのです。私の友人がある夏、會席料理に行ましたら、座敷に甘そうな西瓜が山々と盛り上て、之に白砂糖がタツプリ掛つて居ました。友人はコンナ所ろに餘り慣れない奴ですから、ひどく感心して、サスガ會席料理だ、客の來ないうちから、斯うチヤンと用意をして置く、備はつたものだと言つて、忽まち、一つ二つ取つて食つて居る所へ、女が出て來まして、ソレヤ、滅相なヿをなさ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

います、蠅よけですと言はれて赤面したそうです。ウルサイ奴をたからせて置くものを御馳走だと思つたのですが、議會などは、マヅ、西洋での蠅よけです。

問　蠅よけとはヒドイです、其處に居たグラッドストンでも蠅です乎。

夫は鶴です、鶴がハキダメに居るのです。蒼蠅拂へども去りがたきが故に、其中に混つて事を爲て行くので、前に申した第三種の卓然たる人です。本來、議會のツマラヌことを知つて、ツマラヌ人を相手にして、而して別に大事を決して行くのです。ダカラ、議會そのものを氣には爲ません、其の成り行次第に應じて事を謀つて行くのです。

問　ナル程、分りました、ソレデ、日本の議會は前途どふでせう。

私などは餘り考へたことがありませんから、知りません。然し兎に角、色々にやつて見る方が善いと思ひ升。其の色々にやつて見る所に、望も出來、信仰も出來て、人氣が集まるのですから乎。總べて、望が無いと、不景氣です、不景氣が人心萎微で、財政困難の元です。國會が出來る迄は、之さへ出來ればと望んで待つて居ました。出來てからは失望したが、政黨内閣と云ふことで望んで居ました。政黨内閣にも又失望した所ですから、撰擧法の改正などが、此次の望でせうよ。ドウセ、改正したからとも、議會が善くなる氣遣ひはないのですが、マア、次に〱望を作つて行なければ、倘更ら眞暗になります。

問　そう言へば、心細いものです、いつ迄、いつても到底ダメデワありませんか。

ダメですとも、無論の事です。ダメだと分つたもの斗りになれば、まだ善いのですが、なか〱ダメダとは思ひ切れんものです。歴史はくりかへすもの、人は同じことをするもの、塞ノ河原の子僧が、石を積んでは鬼にこわされるのですが、此の鬼が外から來れば防ぎよふもあるが、ミンナ自分から出て來る心中の鬼です、防ぎよふがありますまい。ソコデ、いつ迄いつても〱同じこと斗りして、望もないものに暫らく望んで居る。其中に眞の準備をしたり、救ひをしたりして、先々世を安らかに、民を穩やかにして行く人がありさへすれば善いのです。ダカラ、西洋の眞似をするのは苦しくない、たゞ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

眞似をする丈では困ると云ふのです

問　眞似の外に、何をするのです。

特色を發揮するのです。特色と云ふと、何か色があつて、之を自分で掲げるよふに思ふものもあるが、夫は間違の元です。特色の何たるかは、自分には分らない筈で、自然に出て來べきです。彼の眞似やに反動する人々が、國粹とか、日本主義とか云つて、何か特別に固まつたものが一ツあるよふに思ひ込み、之を得意に慢心して、維持しよふとする、夫が頑固々陋と云ふのです。守るべきは道一ツで、其外に守るものは無い、守らふとして固まつて居るうちに進歩に後れます。眞似るのは善くない、守らふとするのも亦善くない。特色發揮とはソンナけちなとではありません。

問　ナンダカ、變です。夫では、何か特色を發揮するのです乎

自然が發揮するので、自分のするとでないです。別に變つたとはない、一定不變の常道を履み、怠らず、僥倖を求めず、勉強して相應の事を仕てさへ居れば、自から特色が出て來ます。ソノ特色が眞とに賴母しいものです。玆に、流行ツ子の

紳士がありませう、身なりから、髯の工合、指環、金時計、お抱へ車で、夫は／＼世話しそうな様子です。株だとか、會社だとか、中々利巧な口つきだが、之は當世一般の流行で、何も面白いとはない、又信ずべき所もない、誰も賴みにするものはありますまい。別に、玆に百姓がある、眞面目に勉強して、人を賴まず、僥倖を望まず、虚榮を求めず、左りとて、一と通りの百姓とも違つた一種の辛棒强い所がある。ソコデ、心あるものが見たらば、何方が賴母しいか、何方が、ツマリ大キナ身代になるか。吾等の考へでは、當世風の紳士紳商がツマリ長久堅固な身代を作らふとは思へぬ。ホンノ、もふけては又失ない、失なつては山をする、一生、カルワザシのよふなもので、本當の進歩はないと思つて居る。ダカラ、寧ろ一方の百姓の方に賴母しい特色がある、その特色がいよ／＼發揮して、人の信を引き、人の望を維ぐ、堅牢なるものとなると信じて居るのだ。ソコデ、心あるものが、どちらの人物と永久の交を固めよふかとなれば、必らず、あの眞面目なる農家の方を撰むであらふ。列國が本當の同盟をするのでも矢張りソレデ、浮氣な流行ツ子には口さきの交りです、同盟は

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

しますまい。ソコデ、日本と支那と、どつちが、列國をして同盟を求めしめるかと考へて見たいものだ。

問　支那は餘り感服しません、ドウセ、分割でせう。

分割かも知れません。然し分割になつたらドウナノデス。何も支那人は憂ひはしますまい。日本人が隣の疝氣を頭痛に病むので、無益なヿです。支那人は、國が取られるなど丶思つてる人民ジヤアありません。

問　夫でも、分割されゝば取られるのでありませんか。

取られません。名をやつて喜こばせる丈です。名は取られても實をやらぬと云ふのが、支那人の特色です。若し、國を取られたと云ふヿを氣にしたら、今の滿州政府でも實は他國です。臺灣を見ても分りませう。臺灣で益するものは、日本人ですか、支那人です乎。又、西洋人だつてソウデス、昔しは兎に角、今では、支那人の事がよく分つてる筈です。ナンデ之を取りませう。取れば損です。寧ろ今の形を維持して置て、商賣でモウタよふとする筈です。たゞもし列國に人物がないと、トン〱評子で、好まぬ乍らも分け取と云ふ風になります。夫が先づ當代の患と云ふものです。ヤ、ともして此の患を引起すのが、日本の愛國者です。朝鮮の一件から支那に對する列國の均勢をカキ亂したものは日本です。自から之を亂して而して其の餘響に騒ぐべきでもありますまい。

問　支那は夫でいゝとして、其の影響を受くる以上は隨分注意せねばなりますまい。

注意はいつでも仕なければなりません。氣が拔てはダメです。然し、氣をもんでは宜しくありますまい。凡そ國と云ふものは、獨立して居る以上は、外から何とするとも出來ません、たゞ國内から自から促して倒れる丈です。一家でさへ、外から潰すとは出來ません、自から潰すのです。支那がどふならうと、夫は關せざるヿです。

問　夫は不信切ジヤアありませんか。

不信切をしたくはなくとも、信切をする餘力がなければ、何とします。支那は、まだ、日本の政治家のお世話になる程のものでもありますまい。

問　國を取られても搆わんと云ふのが、支那人の根性とすれば、實に愛國心のないヿです。

夫が、支那の愛國心ですもの。日本人の杓子定規で、何もか

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

も許するとは出來んヂヤアありませんか。仁者があれば帝王とすると云ふのが、支那四千年の國粹です。日本とは、丸で國體が違ひます。どれが、いゝ悪るいと云ふべきでない、夫々の流義です。夫々の特色と思へば分る筈です。ソコデ、支那から、儒學を取り、文明をとり、一々真似をしたともあつたが、國體相應に適するようになつて、仁者を王とすると云ふ事にもならなかつた。議會でもそうでせう、追々と年が立つ内には、日本流の議會になるでしようよ。長いものです。

隨感

○草木國土靈性あり

草木國土佛性あり。之を非情なりと冷遇して、つゆのなさけもかけざる人のあさましさよ。國土、人に踏まれて卑しとせす、草木、人に食はれて口惜しと思はざるは、其の獻身なればなり。人之に乘じて暴りに虐用し、獨り得たりとして靈長の權を擅ひまゝにす、能く忍ぶ所ろ乎。彼の土、何んぞ獸することの久しくして、忍ぶことの長きや。色、暗澹として輝さす、深く藏して擧ぐることをせす。匹夫の足下に屈し、醜婦の唾を呑む。われ幾度か其の重厚にして謙譲なるに感じ、身を屈めて掌に撫で、安座して其の褥に入り、以て其の德を贊す。彼の草木や、われ其の傍に立てば、微風徐ろに起りて、枝を伸べて觸れ、葉を落して招く。われ、手をもちて之を撫すれば、欣々として悦動す。其の花を開くや、装ほひを凝して見す、其の香ひあるや、芬々として誘なふ。われ安くんぞ渠に心なしとすることを得んや。日暮蒼然として、心地偏えに寂しく、人語ざわ〳〵として只だあぢきなき折ふし、孤り郊外に出でて悄然として立つも、大地の吾を乘するを眺めて欣こび、草木の吾に傍ふてゆかしげなるを樂しむ。寧ろ人間のつれなきに孰れぞや。屡ば疑がふ、世上の才子、何の利益ありてか自から天地を狹ばめて、其の情界を乏しくせんとするや。故さらに、有情の天地を冷眼に視て、徒らに自から讎たらんとするの所存、何故ぞや。學者それ〳〵形骸の解剖に屈托して、理わりありげに論じ、敢て自から情懷を殺す。吾世に之を罵しるに忍びんや、たゞ其のさびしからんことを惜しむ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

語を寄す、吾が友よ、其の胸襟を温たかにして、友情を發揮し、彼等、語ばなき萬象の言はんとして切りに情を通はすのあわれに動け。

○殺生のあそび

殺生を好みて、遊戯となす、人の心も鬼にはあらずや。彼の生物の死するや、必らず悲鳴す。此の悲鳴を聞きて心地よしとする人の心は何事ぞや。黄鳥囀々として枝頭に遊ぶ時は何んぞ人間の悪逆を思はん、而して人は其の樂しみを意はざるなり。矢をつがえて生物を睨らみ、銃をむけて其の當らんとを祈る。此時、此人、仁心なし。天地哭し、草木歎ず、而して、人や揚々たり。世にもし巧みなる寫眞子ありて、此人の殺氣に満てる面色をうつし、他日其の心の落居て、其の情の動ける時に見せ、誰か悚然として驚怖せざるを得ん。われ昔し曾て腦痛あり、銃聲の快然たるを喜こび、一日、他に借れて山野に遊ぶ。忽まち烏雀の飛ぶを見れば、心氣勃發し、狂喜して追ふ、顧りみるに他事なし、まさに吾れ此時、犬の如く、猫の如かりしか。遂に適宜の地歩を占て、銃を裝ほふて一睨すれば、天朗かに氣清く、小鳥何の禍わひも知らず、喃々として鳴く、彼等何事に戯れ、何事を語りつつありや。余將さに掛金を引んとする時、鳥や此方に向ひ、無邪氣なる顔をもて樂しげに鳴けり。余忽然激感して一身粟を生じ、深く叱して曰く、余何の理由ありて彼を打んとするやと。而して、余に一介の理由もなかりし也。

○淺ましき人の終

不思議に殺生を好く人の大抵は終を善くせざると、世に經驗あるものの知る所ろなり。其人幸わひにして満足の死樣を遂げ得るとも、子孫に及びて怪しきとあり。吾郷に蛇を食ふ老夫婦ありしが、火事の時、わざ〳〵井の中に藏れて哀れの死を遂げたり、而も人の之を見ると獣の死せしが如くせり。吾友の知れる地方に、鰻を取るとの最と巧みなるものあり、其の手に釣り上られし鰻何万尾と云ふを知らずとぞ、然るに彼は晩年頭髪脱落し、全面滑らかになりて、自づと鰻の相貌を呈し、人々之を畜生の如く見たり。又、其の地方に、犬を殺す人ありしが其子双子に生れたり、衣物を嚙さきて着ず、常

に裸体にして寝る〻乍ら兎角に外に出で居りたり、吾友之を見て淺ましきことに思ひ、今尚ほ忘れがたしと言へり。世上、此等の因緣を解釋するに、たゞ生理上よりするものあり。吾等は其の見識の餘りに無雜作なるを惜しむ。凡そ人事を味わいて、世の實相に觀ぜんとするもの、誰か斯る書生流義の放言に首肯せんや。

○天父の慈愛

人の來りて問ふものあり、御身、如何にして、神の大慈大悲を確信するやと。余對えて曰く、他の事は暫らく措く、凡そ人の優れたるものを見るに、皆な慈悲あり、其人、品格を高くするにつれていよ〳〵慈悲を加ふ、遂に知る、人格の尤とも高きもの〻慈悲頗ぶる宏大なることを、推して天上の神明に念ひ及ぼすとき豈に此事實を疑ふを得んやと。

○矜恤あるものは福なり

經に曰く、矜恤ある者は福なり、其人は矜恤を得べければ也と。此語眞とに千古の格言なり。

雑録

二つの微笑

有美

我れに今なほ忘れ難き、微笑二つあり。そはなつかしき戀人の送れる秋波にもあらず、將た王者の悦びに受けし笑ひにもあらで、賤しき乞食の兒と藝人とがなせる微笑なるも、おかし。けふ、雪の積れるを見ても、想ひ起こすは彼の日のことなれ。こは日曜の朝にて、夜來の雪一面に街路に滿ち、世の穢れを隱くさんとすなるに、日さへ朝まだきより照り添へ、世界は俄に光線の多分を惠まれたりと見えて、何となく若かやぎ歸れる心地ぞする。されど追々に熱に溶かされ、其處に彼所に、地がねの荒地を現はし來るも、憂しや。されば、雪どけの泥の流れ、又あちらこちらに張り始めたり。かゝるなかを厭はでビショ〳〵履みにぢりて、己れは杖を街道の最中にひき『あわれなる盲人にどうぞ……』と呻りながら、一人の童兒を戶毎に歩るかしめて、物乞はしむるものあり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

その頂ける菅笠の下よりのぞき見れば、四十ばかりにて先天の乞食とも思はるゝ、にくげなる人相の婦なるも、淺まし。暫く、我が宿とれる二階の下に來れるよと思へる頃、俄にその罵り叫ぶ聲の聞えて、また童兒が咽り泣きする物音さへす。急ぎ窓に首さしのべて伺へば。如何に。かの婦は、無殘にも、その童兒の髮毛を握りて、我が家の下階の人住ひなく、締切りあるを折りよしと見てか、銅板張りたるその戶に荒々と顏うちあてゝ、ムリ／＼と磴りつけ／＼呵責折檻するなりけり。今でこそ仲々に小づるくなりはてゝ、大抵人並みのことには、怪しとも思はざれど其頃には少しのことにも、人情の屈辱を慣れる性のことゝて、側隱の情や起りけん、殆んど前後の辨へさへなく、急ぎガタ／＼と梯子をかけ降りて、その塲に至れば。見よ、なま／＼しき血は、地のあなたこなたに、たれ滴りて薄氣味惡く、眞白の雪さへ、紅の斑點べるあり。童見は涙にむせびて、クヨ／＼と泣くのみなり。あはれ、他人の門にたちて物乞ひ、情知らずの馬鹿ものに、『御無用』と退けらるゝさへ、餓鬼道の苦みなるに、生みの親にまで『お辭儀の仕樣の高ければ：…』とて、かく責め罵らるゝこと、さても何等の因緣ぞや。地なる血の跡はこれその鼻のすりつけられて、出血せるなり。見よ、又その指は裂けて、これも血を滴らさんとす。蓬の如き髮と、垢ににちめる身と、木の葉を綴れる如き衣とは、寧ろ其美はしきものなれ。是に於て、我れ憤然の氣を呵して、大喝兩三聲、其婦を叱咤して、遂に言なきに至らしむ。思へば、我れは義に勇む勳爵士か或は古くバビロン王ベルシヤザルを其宴席に罵れる預言者ダニエルの心なりけむ。

晝過ぎてのちのことなりき。其處より程遠からぬ友の家に訪れて、火鉢圍みながら、物戯れ居りしに、門をたゝひて物乞ふ音のしければ、袋のうちより五厘銅貨取り出でつ、席を離れゆけば、その乞食とは前の童子なりける。金を、我が手より受けて、つと立ち去りしが、一二間ほど歩みゆきて、朝のことをや思ひ起しけん、ちよと立ちとまり、振り向へりて我が方を見、その顏に浮べたるもの、これ微笑なり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

今一つは戀人の微笑なり。されど、わが戀ふ人のものにはあらず。玆に、席がけせる小屋一面に、物珍らしき田舎の觀客

をあつめながら、いゝかね太鼓のはやしおかしく、樂屋うちより出で來りて、足藝にとりかゝらんとする興業輕業師あり。色稍々黑けれど、その眼もとの凉しく、鼻筋の通りて、顏のきめ細やかに、何となく艶がちなるは、其職業の賤しきこそあれ、麗美なる男子のうちに算へられぬべし。今や一揖して身仕度取りなほし、體を仰向けに臥すべき布團臺の上に取りかゝらんとし、しばし背を觀客にむけて振り返へれば、こゝには、一段高きところに、いゝはやし方の仲間に交りて、肩衣恭しくかけながし、眼鏡越しながら、前にひろげたる歌本見て、聲あやしく歌ひつゝも三絃彈く若老衍の婦人あり。齡五十を越しもせしにや、顏のあちこちに年波さへ寄せ居れど、なほ何となく仇なる影の窺はれて、夕陽すでに海に入るも、なほ輝く光の、西の空を染むるとも見るべし。聞けば、十數年の昔には、幾多の男泣かせし罪多き姉娘にて、其名も我が町に高かりしものなりしとかよ。かの輕業師、こゝにその前に立ちつゝ手拭かひ取り、兩手の間にクルクルとまわして繩をなし、輕く鉢卷して後なる簾によらんとすれば、怪しや、忌しき微笑は、この男の眼もと口もとより逃げて、かの婦をも微笑ませぬ。昔の女帝が、藤原仲麿を見て、惠美れしも、かゝりしにや。今も忘れられず。

時事

所謂内地雜居準備とは何ぞ

鷗村

日本人は兎角、來らんとする事柄に對して、常に氣を揉み過ぐるの習ひあり。彼の國民の胸腦に左まで沁み込み居らざる憲法發布及び國會開設の以前には、之をば、千歳一遇の盛事と唱へて如何に狂奔したるか。今や内地雜居なるものを眼前に控へてより、條約改正以後、此頃に至りて世人の之が爲に準備すると稱するものゝ、諸般の方面に於て、案出せらるゝものを見るに、一笑を値ひするに過ぎざるもの多し、吾人は内地雜居の敢て大問題に非らざるを屢々論じたれば、今更之を繰返すをなせじ。たゞ、世人の準備と稱するものゝ、果して如何なる種類のものなるかを概見すべし。

一、一昨年頃、東京の學者官吏間に組成せられたるとありき、内地雜居準備研究會（今は其消息を聞かず）。

一、數多町村有志者及び教育會の法典研究。

一、女子教育の方針、公立女學校增設說（菊地大麓の文部次官たりし時の演說。高嶺女子高等師範學校長及び野口同校教授の議論等を見よ。）

一、日本海岸某地方の、品物に外國語を用ゐざる事、外國人を排斥することを決議したる事。

一、豐後耶馬溪附近の村民一同は、内地雜居の曉に、外人の奇勝を探らんために入り來るもの多かるべく、爲に外教傳播の虞ありとて、未來永劫決して外教徒たらざるのみか、之を信ずる者と交際せざる事に定めたり。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

一、本願寺派其他佛教の、耶蘇教膨脹拒絕の爲め布教（前々内閣が之を依賴したりと傳ふる事。）
一、東京府下耶蘇教徒の教勢振作演說會。
一、男女間に英語研究の流行、
一、新橋藝妓の英語研究、
一、京都祇園藝娼妓の風俗改正及び英語研究もまた準備の一なるべし。
一、府下富士見小學校女教員の舞踏稽業、
一、東京に一大ホテルが新築する事

其他なほ異聞なるべしと雖も、以以上は、たゞ吾人の記憶に存するものを擧げたるのみ、また月次も前後し、中には既に雜居ともならざるに夢の如く消えたるものもあるべしと察せらる。此等の準備と稱するもの、畢竟兒戲に類するものに非ずや。其他、地主家主の外人當込の、借家新築、商人の一攫千金目論見等もあるべし。世人は、七月一日に、諸外國人、潮の如く、國内に流れ込み。日本人は、片隅に押寄せられさうに感ずるものゝ如し。故に口を開けば、内地雜居といふもの、凡人にも、學者にも、論客にも至りて多し。なほ此春先より四五月頃にかけては、いよ／＼甚しかるべし。たゞ、其中にも、彼時來るに當りて、外人に耻ぢざらんやう、國民の體面を揚げ、紳士淑女の品格を高くすべしとの、時事新報の議論の如きは、實際には、何の沙汰もあるまじけれども、時を利用して、多少世に益あるの議論なり。

當議會

井上次郎

たゞ／＼星の全盛と評し合ふのみ。どれも、これも、賄賂の故と評し合ふのみ。斯く評し合ふのみにて何んたる變りしとも、猛烈手段もなし、ナサケなき事斗りなり。議員に歳費を增し、位を與へ、追々之を俗吏に仕立てゝ、眞の議會は、草莽の内に開かる。天下、口が開いて議し、議員耳を塞いて鈴を振る。一隅の去來察すべし天下の人心の趣むく所察すべし。もし久しうして此儘ならば、日本は朝鮮なり、朝鮮は追々と囘復し來る、それ朝鮮に於て、「日本征伐」などの聲を聞くに至るは、何時頃の事なるべき。

新刊書

農業本論を讀む

東根

本書は篤學謹厚の學士、新渡戸稻造氏の所著、昨年秋の出版にかゝる、當時已に好評嘖々として稱賛の聲絕えざりければ、余亦之を讀過せんとして其期を得ず、漸く本年一月に入り少閑を得て之を通讀しぬ。近來著作多しと雖も未だ本書の如く余をして愛讀措かざらしめたる者なく、此類の書中、殆んど稀有の好著たるを覺ゆ、但し此の如き好著も「農業本論」と單稱するが爲め、世人或は普通の農業書と同一視するやも難計ものあれば、稍後ればせながら一言紹介して、普れく好學の士に推薦する所あらんと欲す。

本書は、農の定義、農學の範圍、農事に於ける學理の應用、農業の事類、農業と國民の衛生、農業と人口、農業と風俗人情、農民と政治思想、農業と地文、農の貴重なる所以等の十章より成り、四百五十餘頁の大册子なり、農の定義に於ては各國の語原より推究し、農學の範圍に於ては其位置、主眼本領を明かにし、農事に於ける學理の應用に於ては、實業と學問、農學の實地應用を說き、農業の分類に於ては、種々の分類を說けり、以上四章の題目たる普通農業本論中にも見る所なれども、其精密周到にして創見と新着眼の多き殆んど他に比較すべからざるものあり。第五章の農業と國民の衛生以下第十章に至るものは、他書に於ては僅かに見るべくして、本書にありては特に大部且つ重要の地位を占めたり。

國民の衛生と農業とは如何の關係ある、氏は、農民は長命なると、醫術は成効田舍に著しきと、都鄙に於ける死亡の割合嬰兒の夭死、男女の健康より說き、田舍生活は女子に適せざる理由、都鄙に於ける女子の生殖力及び、田舍は强兵供給の泉源なるとを論じ、過度の勞働は農民を損ふとし、其農業と人口の章に至りては村落の沿革より、都府の起原、其增進の趨勢と理由とを說き、本邦人口の集落を論じて田舍の衰頹するを嘆じ、風俗人情の章に入りて、分業の性情に及ぼす影響

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

より耕作物の人氣に及ぼす影響に及び、田舍に姦淫多きとより其奢侈、惡習、犯罪の性質を説き、政治思想の章に入りて農民の政治思想の幼稚なると、其思想の田舍には伸暢せざるとを説き、更らに地文に影響する章に入りて、動植物の傳播變性等を論じ之を證するに統計を以てし、古今東西の事例を列擧して苟もせざる所、正しく其者の博學多識と觀察の奇警とを知らしむ。余は是を以て本書の本部農業社會學、又は農民社會問題論と論するを適當なりと思惟するなり。

凡そ農民の社會を知らんとするものは、本書に尋ぬる所あるべし、農民の衛生、犯罪、人情、風俗、政治思想、人口の配布、村落都會の關係等、極めて明断的確に教ゆるなり、農業の本領を知らんとするもの又之を讀むべし。

地學より入りて風土、風致、並びに政治を論する志賀氏あり同じく地學より之と類似せる論を爲す者に矢津氏あり、内村氏又地學と神學を加味して奇警の觀察あり、又農學社より社會問題に注意するものには駒場に横井時敬氏あり、札幌に新渡戸氏あり、蓋し氏の如く還般の消息に通ぜるもの殆と稀有なるが如し、是れ余輩の珍重措く能はざる所以なり。

世に社會問題を唱ふるものあり。而かも多くは工業の一部に偏して、其言ふ所皮相に過ぎ、唯其流行を追ふのみ。農に至たりては纔にエッケルトの土地改良論と片々たる論文あるの外未だ一讀あるの價値あるものなし、本書出て、始て農民に關する社會問題の全般を窺はしむ、是れ啻に農業上の好著たるのみならず、社會學者社會問題攻究者に至大の資を與へたるものと云ふべきなり。

今の特に面白しと思へるは、地方學研究の要を絶叫して止まざる如き其一なり、封建時代の制度漸次瓦解し去りて地方の自然的風習其跡を收めんとして、却て前代の習俗に拳するの傾向ある際、我學界未だ地方學に從事する者あるを見ず、氏又農學者なりと雖も農に偏せず、リストの説を取りて最後の進歩せる社會は農工商の三者平均せざるべからずとして、現今何れにも注意すべきを説く所ろ甚た面白し。地租增徴と云ひ、市獨立選擧と云ひ、如今農工商の互に衝突する問題の續出する際、暗黒なる政治家の輩、須らく三者平均の眞理を味はざるべからず、又政論の空談に走り急激の空想裡に入るときは農業の貴重なるを知らしめ、中央集權の腦充血に類せる發達は、農業の不利たるに止まらず、延ひて國家に害あるを説くの精密なる農を主とし又は客として、社會百般の事項に論究せるもの、之を農業社會學と稱する豈に不可ならんや。余讀下する際。思へらく、觀察奇警、引證豐富なりと雖も、未だ斯々の事項には論及せざるべしと、漸次進讀するや、之より以上に及ぶものあるを以て、氏の識の博きのみならず殆んと天才的のものあるに慾服一方ならざるに至れり。余の本邦書を讀めるもの從來甚だ少なからずと雖も、此書は本邦人の著書として優に第一位にあるものと信す、大學出身中にも多くは其類を見ると能はざるものなり。今日片々たる學士の輩、十把一束(せつぱひとからげ)となりて始めて之を能くせんや。發行所は本日橋區本石町裳華房(定價一圓貳拾錢)

世界讀史地圖

陸軍教授　依田雄甫氏著

歷史と地理とは二者相離るべからず、地理を知らずして歷史を談するは空なり、英雄豪傑の起伏、戰爭の勝敗、人文の發達、國家の盛衰、大に地理に關するは今更めて言ふの要なし曩に日本歷史地圖の刊行ありて本邦史研究上の一大生面を開き、頃日又支那彊域沿革圖成りて支那史の研究に資する所ありしが、本圖は万國史を究むるものゝ坐右に備ふべきものなり、ちぐりす地方古代諸國より最近日清戰地、人類並び宗教に至るまで、大小三十一圖を以て形勢の變化、一目して瞭然たらしむ、附するに説明を以てせり。本邦語を以て此種の地圖の成れる之を以て嚆矢とす、學生の便利此上なしと云ふべし、吾人は著者の勞を多として之を謝するものなり。定價一圓五十錢、神田裏神保町富山房發行)

新萬國地圖

志賀重昂氏
矢津昌永氏　共著

本圖緒言に云く、新萬國地圖は予輩等の持論たる「自然の土地」と「人類の營作」とを可成的結合連絡せしめんとの趣旨より編纂したるものなれば世界萬國に於ける人類が地上に働作せる結果の重もなる件は圖上に收めんとを記せり」と、此趣旨に基きて、斯學に堪能なる志賀矢津二氏の著はす所、總計九圖より成る、中學、教科用として特に適當なるを信ず、發行所は日本橋區三丁目丸善書店なり。

佐久間象山

之れ亡社友、小北木秀野氏の遺稿、小册なれども佐久間象山の性行を敍し、其の大面を窺はしむるに足る、秀野氏文才あり、俳諧史傳を始め生前二三の著あり、本書は未だ君が才華を知らしむるに足らざるも、遺稿の一として吾人之を尊重措

かす、島田沼南、戸川殘花氏を始め數多の題跋あり、以て氏が同人間に愛重せられしを知るに足るべし、定價十錢、日本橋本石町裳華房の發行にかゝる、

◎敵討護持院原　　櫻痴居士作　　春陽堂版

此脚本は、歌舞伎座立作者櫻痴居士が、同座正月狂言にして、菊五郎の爲に書卸したるものなり。筋は、幕末の人黑奉行遠山左衞門尉と、鳥居甲斐の用人本庄茂平治の事蹟とを結び合せたるものなるが、前半は彼市尹にかゝり、後半は茂平治にかゝり、其間殆ど何の連絡も無く、菊五郎の扮り役を作らんが爲に、遠山と本庄の如き人物を打ち出して、劇の全體を度外したるが如き、脚本にしても、劇としても、共に失敗なりといふべし。(曲浦)。

◎新小説　　第四號第三卷　　春陽堂版

小説には。柳浪の「心の影」一編を收めたるのみ。山氣なる男と詐欺師と曖昧女とを材料とす。共によく出來たりとまでに云ひ難し。紅葉の新油柄杓、藤田文藏の塑像談等讀むべし。五月號を題として、懸賞小説を募集するの廣告あり。(曲浦)。

新雜誌

◎英和通商雜誌　明治十八年に「英和商賣用會話」の出版以來、斯の道に於て久しく知られたる富田源太郞氏、此度、題號の新誌を出版す。本號には「小切手」の話、夜中の船、及び其の揭ぐる燈火の別」等なり、實用會話あり。當節此邊の修業するものには、恰好の案内書なり。

◎淑女第一號　　片々欄内に評あり。

◎東京青年雜誌　開卷初號一種清新の氣あり、特色あり、紛々たる多數の中、亦た之あるを歡迎す。本號、荒木古童翁の訪問記の如き、翁の入神は更にも言はず、叩いて此の神髓を告白せしめ、よく筆受したる伎倆は、少年記者の筆としては頗ぶる多とすべし。翁曰く、

器用なものはドウモいけません、第一、辛棒が出來ません、器用な人の藝を覺えるは、丁ど新しい石燈籠へ苔を持て行て付けた樣なものです、不器用な人の眞實を熱心を以て覺えたのは、年を經て自然に苔の蒸した石燈籠の樣なものです、器用は決して大きな器ではありません。

私は此年になる迄、師匠は無つたのです、藝を其まゝソツクリと敎へてもらつた師匠と云ふのはありません、然し宇宙の物は凡て私の師匠で、一口に大きく云へば、私の師匠は森羅万象サンデス。

波間鈴聲と云ふ曲がありますが、之は濱邊に波の打寄せては引返す所を取たものです。扨て之を其儘に吹ては、何處が波の寄せて來る所やら、引く所やら分りません、風の吹き樣で、波は四六時中變つて居ます、寄せて來る時は、どんなであるか、引く時はどんなであるか、とても行て見れば分りません、寄せる時は、寄せて來る樣な勢で吹き、引く時は又引く樣な加減に吹なければ、なる程波がと云ふ樣には聞えません。波は私の一つの師匠です。一寸と、煙草をのんでも、烟の昇り方に種々あり升。木の葉の落るにも、雨の音にも、鳥の羽音にも、皆夫々趣があり升。此等は皆な私の師匠です。

コンナ遊藝の樣なものに限らず、學問でも左樣でしよう、之で卒業と云ふとはありません。私は此年になつても、決して自分の伎倆に滿足は出來ない。良い師匠があつたら、一日でもよいから習ひたいと云ふ心は始終たへません。

よく皆サンが、少し吹けて來ると、ヤレ一の調子が低いとか、二の音が上つて居るとか種々なとを云ひます、然し三年や五年の修業でソンナとを言ふ時でない、私が良いと云つて笛で吹て、私の年まで吹いた上で、何處が良いとか、何處が惡るいとか云ひなさい、とよう云つて聞かせるのです。

◎海國少年第三章第一號　『文林』の益すにぎやかなるを見る。戊辰當時の將伯の寫眞版あり。

◎十善寶窟第百七輯　雲照律師が「勅語訓解」堂々たる一万五千言歷代の帝上佛法に即依ありし篤信の勅語惣べて玆にあり。

◎反省の鏡第四年一號　佛教女學雜誌中の尤とも優美高雅のもの、想と、文と、同とに床しきこと也。「古錦襴」など、日本先代の女子のほまれと云ふべし。

片々

●新聞紙と家庭記事　當時諸新聞紙中特に家庭の爲の一欄を置くものは國民新聞と大阪毎日新聞となり。國民新聞の方は、家庭雜誌を合併したる結果なり。今兩新聞が家庭の爲め、如何なる記事を錄するかを知らんが爲に、其題目を列擧すべし、外題を見て、其內容を窺ふこと又難からじ。

◎國　民　新　聞

家庭實務（二月四日）◎愛婦の事）同五日、◎家庭實務（同八日）◎同（同十一日）◎同（同十五日）

同新聞は新に家庭實務欄なるものを設け、讀者の投書を募集する由廣告せり。

◎大阪毎日新聞

一家言（あきしく）（二月二日）◎日本料理（綴稿）茨木宗右衞門翁口授（二月三日）家事問答（同日）◎同（同五日）◎同（同八日）◎一家言（あきしく）（同九日）◎簡易料理（同十一日）◎家事問答（同十二日）◎飲料水の可否（同十四日）

同新聞は、此等を記述せる欄を名けて「家庭の栞」と云ふ。此外松山市海南新聞も、時々「家庭の爲」とて、片言を記し、岡山日報にも散見す。仙臺東北新聞も二月十日より「日本料理の話」を揭載し始む。

●新婦人雜誌「淑女」　東京紫蘭社より出版す。大和田建樹氏、之が顧問たり、體裁は、「女鑑」と「女子の友」との中間に在り。

●高等女學校の位置　當市高等女學校の位置の餘りに、北方に偏倚して通學の便利を欠くを非難し、若くは醫學校と相對して、上校下校の都度々々男生女生顏を合はすが、不都合なりとて、近來同校の位置に就て苦情を鳴すもの漸く多きを致せるが、學務當局者某氏は以上の說を駁して曰く、同校の北方に偏倚して、南區及び西區等より登校の不便なるは事實なり。左れども此人家櫛比し、地價高き大阪市に於て中心に同校を移す事は云ふべくして行はれざるもの、況んや馬車絡繹人語喧々の地は、女子の教育には殊更に害あるをや。通學に不便とあらば南にも西にも分校を設くるに若かず、其男生徒と顏を合すの非難の如き事實に於て有力なる說とも覺えずと云云。

（大阪毎日新聞二月五日）

●下田歌子女史　前號にも一寸紹介なし置きたるが、報知新聞の下田歌子女史の、性質を評するに曰く、負け嫌ひ、大膽頓着、自信に厚し、大膽、貞節、至孝、忙しきが樂み、奉公人へ信切なりといへり。愛讀書は孟子、韓非子、老子にして、之に次ぐは、萬葉集、八犬傳、俠客傳、西洋の名詩集等なりといふ。

●絲雨子の女子論　正直正太夫事齋藤綠雨、萬朝紙上に例の奇警の筆を以て、頭より女子を惡口してかゝれり。轉警子あり、同紙上に之を難じて、楯の一面を見たるものといふ。

●信濃每日新聞　は文部省統計によれば、全國高等女學校の生徒は比較によれば、長野縣は第十番目に位す、これ縣下の面目と其發達に關す。よりて現存の長野高等女學校の外、更に松本、上田、飯田に、同校を新設すべし。時下各町とも正に將に來年度の豫算を決議せんとするものなれば、敢て高等女學校の新設を勸告すといへり。

●大阪節分の奇習廢まんとす　大阪は舊習の多き土地柄とて、節分の如き、福は內鬼は外の豆蒔も此處彼處に聲高く聞ゆるが、風俗取締の嚴重なると世の嗜好の追々進み行く爲に、例の化裝も昔日程には極端に陷いらず、市中にては先づ老婆の島田、蝶々を結ひ少女が丸髷を戴く位が關の山にて、花柳の街に於ても娼妓が檽妻風を裝ひ、藝妓が奧樣に化け、茶屋料理屋の若衆丁稚などが可笑しき髮を結びて馬鹿を盡すはあれど、是れさへ年々に減じ行く姿なり。又例年俳優より出し居る羽根紋は今年限り廢止することゝなり、婦女子が之を貰はんとて俳優の門に集まるの醜體も、漸く昔の夢と消え去らんとするの傾向あり。

（時事新報）

●火災に手拭の用意　火災に際し老人婦女子などが、煙に包まれ出端を失ふは每度の事にして、屈强の男子と雖も時々之が爲めに燒死するもの少なからず、此場合に最も必要なるは手拭にして、之を以て自分の顏を蔽ひ、後に結び付くれば、容易に煙を防ぎ得るのみか、晝間ならば其儘大抵の處に迄進入して家具家財を取出し得べしとは、實驗者の話なり。

（同上）

●火傷の療法　さて、大阪每日新聞に左の二投書あり、火傷をなしたる時は、直に極上等の溶き白粉を塗る可く、痛みを去ると共に、燒爛るゝ事なし。

火傷には灰汁を二三回局部に塗抹すべし。

●關西の美育　大阪每日新聞文學欄に、天行雲士なるものゝ「關西文壇と美育」を論じたる中に云く、

最後に予望の關西教育界に就て、大に怪訝に堪へざる處の者は、好く審美的弱性に富み、文學的の性情に富める、淸婉なる淑女を教育する女學校に於て、甚だ美育を輕んずるの邈あると是なり。彼の東京の明治女學校の如きは、基督教界の木村長門の守と評せらるゝ、嚴本善治氏の薰陶を以て任ずる處、其發行に關する女學雜誌の如きは、東都の文壇に女學雜誌の一派を生ぜしめ、透谷、天知、藤村、殘花の如き理想派を以て一時淸名を擧たるの文士を生じ、滔々たる寫實派の潮流に抗して日本の理想界を動かしたる事、轉と大なる者ありと謂はざる可らず。然るに之に反して關西學界の沒趣味にして俗調極れるが中に、美の天使を教養する女學校の俗骨纍々たるを見るに至つては一掬の男淚を惜む能はず、其一斑を評

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

せば、神戸女學院の異人臭き、梅花女學校の女學生臭き、高等女學校の淑女臭き、同志社女學校の學者臭き、哀れ美の天使は臭骸を包むの怪物を化し去るに至ては、予輩の彼等の胸底に響く幽聲無聲の美の調を聽收して甚だ痛惜に堪ざる處云々。

●女學雜誌四百八十號に對する新聞紙の評言

英と露と支那、台灣別莊論等あり女學評論諸欄必要の應鬱なからす　（因伯時報二月五日）

●社說に英と晉と支那、臺灣別莊論、李、春畝先生に一言す等あり。隨感の海舟先生

●記事極めて趣味あり　（新潟新聞二月五日）

逝くと題せる一篇惻々人を動かすに足る。巖本氏の筆か。　（山梨日々新聞二月五日）

●社說に女學評論に隨感に雜錄に時事に大に女學に關する意見を開陳し、兼れて教育の改善を企圖せんとせり。眞に婦女子の好伴侶座右に備ふべき雜誌なり。　（北陸政論二月三日）

●社說欄の英と晉と支那、臺灣別莊論。李、春畝先生に一言す等奇警の文字に富む。雜錄欄宵柳有美の街頭の佳人。櫻井鷗村の子を思ふの愛孰れも趣味津々たり。　（中國公報二月九日）

●女學生に關する醜聞

⦿處女の不品行（防長新聞二月八日）⦿女生の亂行（東京朝日新聞二月八日）⦿女學生詐僞を働く（東京朝日新聞二月九日）其他。

●女丈夫の寫眞術　故山岡鐵舟の遺孃、兼て武術に達せるが、此程より、寫眞術を研究して、ゆく〳〵之を營業とせんとす。

●京都祇園町の風俗改良（矛盾のをかしみ）　京都祇園新地にては此頃風俗改良の問題出て、女紅場議員幷に婦人世話係等にて相談なし、其第一着に太夫が卷帶にて廓內を步行するを禁じ、外出の時は必らず袖襟を着すべきこととして、去る八日より實行し、又第二に遊廓の風俗は市內一般の孃達が見習ふの傾きあれば、成るべく取締を嚴にし、淫靡の風俗をなさゞるとし、第三はいかに藝娼妓が賤業なりとはいへ、仲間の客を橫奪なし或は金を所持するさ見れば、飽まで之を奪ふ如き惡弊往々あり、かゝるとは只に浮薄の至りのみならず、永久に遊廓の衰頽を招く基なれば、宜しく藝娼妓に女大學女庭訓其他の書を授け、遊廓にあつても相當の品格を保ち。一旦落籍して他人の妻となるも、決して差支へなきやうなさんとの議あり。中には十分教育をなして、吉野八千代其他の名妓にあやかるものを出さんと意氣込みをる。而して英語の研究は今日までの成績に徵し、或は生意氣となる傾向あれば、こは各自の意思に任し、女紅場よりは干渉せざるとに決したる由。と二月十四日の千代田新聞は記せり。藝娼妓に女大學、女庭訓とは滑稽なり。益軒等地下に泣かん。矛も亦盾極まれるかな。

●婦人の投票案內　さて前橋市上州新報に左の奇妙なる投書をなしたるものあり。

僕は左の如き完備したる婦人の投票をして貰ひたい、斯くの如くなれば將來良家の女子をして其の業を奬勵せしむるは勿論、併せて風俗矯正の一端にもならんと愚想すれば也　（藥舖頭投す）

婦人……
- 身體………容貌美……愛嬌あり
  - 中肉中丈
- 機敏
- 貞實
- 柔和……藝能
  - 裁縫……挿花
  - 琴、三味線
  - 機織……絲取
- 應對
- 讀書
  - 高等小學
  - 卒業程度
- 職業

●結婚と離婚　高知市某富豪慳吝を以て名あり、其長子の爲めに嫁を迎ふ、結婚の當夜結納として金五十錢を贈り、松魚の中骨を煮て客に饗す。新婦及び其父兄等大に怒り、卽座に離婚を申込み夜を冒して家に歸る　（宮崎新報二月十四日）

●侮辱　長崎商業學校は洋服着用の制を定む翌日三名の生徒和服を着用して、昇校せしに、教員等强て其襟に和服許可と大書せる木札を掛けしめ、衆生徒に示して之を辱しむ。今に都下小學女生徒にも綿服許可の木札を掛けしむることあるべし。　（東京朝日新聞二月六日）

●男女高齡者の數　我が國にて、（臺灣、及、附屬諸島を除く）男女齡、百歲をこえたる人數は、左表の如しといふ。男に比ぶれば、女の方まされり。

年齡	男	女	合計
百一歲	七十三人	百二十一人	百九十四人
百二歲	三十九人	八十七人	百二十六人
百三歲	二十八人	六十三人	九十一人
百四歲	八人	四十八人	五十六人
百五歲	九人	二十二人	三十一人
百六歲	五人	二十四人	二十九人
百七歲	五人	十一人	十六人
百八歲	三人	七人	十人
百九歲	二人	四人	六人
百十歲	……	二人	二人
百十一歲	十人	一人	十一人
百十二歲	……	一人	一人
合計	……	一人	一人
合計	百七十三人	三百九十二人	五百六十五人

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●文明の度と男女の數　志賀重昂氏の「風土要論」に曰く、一國男子の數、女子の數よりも勘きは、世の文明に進むに從つて、必然起るべきの現象なり。而して我國の日本海岸は概するに、男子の數女子の數よりも多く、太平洋海岸は之に反す。故に知るべし、兩地方の文明の度に差異ある事をと。

●野口保興氏の女子教育上注意說　女子高等師範學校教授野口保興氏は、內地雜居近きたる今日、女子は、古來の禮法を固持せず、外國人の行ふ度に調和するやうにして、万事、交際的なるべし。衣服も、絹服の如き、不便なるものよりも、以後は宜しく「かしみあ」等の如き毛織物をも用ゐて、よく活潑なる行動に便ならしむるを望む。其他家內日常の調度調理より、會話上の事柄書簡文章の記載材料に至るまで、大に新知識を採りて改良せざるべからず。單に舊套を守るのみにては、到底彼等「外人」に對して相下らざる品格を保つと能はずと云々と。

●女子教育に於ける內地雜居の心配　女子高等師範學校長高嶺秀夫氏の說（前號「新雜誌評」女子の友の項を見よ）といひ、このまた同校教授野口氏の說といひ、我國女子教育最高の府と稱すべき彼學校より出つる說の、如何に、女子教育の爲に、內地雜居の一事を心配するかを思へ。吾人の見る所は、大に諸氏と異るものあり。（第四百七十九號時事欄參照）。二氏の說の如きは前年歐化時代の說を、不覺の間に繰返すものに非らざる乎。

●內地雜居準備　麹町區富士見小學校の女教員は、每朝始業前に舞踏をなし、尙躰操の正科時間を利用し、高等科三四年級の女生徒にも、同樣の傳習を爲す由、これはこれ、內地雜居の準備なりとか。

●女子の大學正教授　和蘭及米國には、女子にして大學正教授たるもの、各一人あるに至れり。甲者は婦人病學を講し、乙者は細菌學を講ずといふ。

●山梨縣女兒不就學の原因　山梨縣內、殊に郡內領と稱する南北都留郡の如きは、甲斐絹の特産地なるを以て、女子とさへいへは、幼少より此業に從事せしめ、我子女のみならず、他人の子女をも養子として迄も之を課するの有樣にて、勢ひ殆と女兒を就學せしめざる事となれり。其他マツチ製造場、紡績所製造所等にて、幼少女子を雇入れ、彼等は早くより家計の助をなし居るを以て、就學なきは六ケ敷なりといふ。

●女學文壇雜俎　本誌〆切まで）

◎余の知れる獨逸婦人……………………讀賣新聞二月十一日
◎日本婦人社會の慘狀……………………時事新報二月十一日
◎可憐なる少女（半可癡）………………德島每日新聞二月四日
◎高等女學校を增設せよ…………………信濃每日新聞二月三日
◎日本婦人の境遇に就て感を述ぶ（某女）……時事新報二月十一日
◎夫人の素顏（下田歌子女史の事）……………報知新聞連載
◎女子論（失題）（綠雨）…………………………萬朝報
◎兩子の女子論（轉替子）…………………同二月十一日
◎女子教育に關する注意（野口保興）……教育實驗界第二卷第三號
◎女子の父母に對する道（岸田松二郎）……女鑑第百七十四號
◎母親のため……………………………兒童研究第四號

時報

◎學事

●高等女學校令　曩に高等教育會議諮詢を經たる高等女學校令は、二月八日勅令第三十一號を以て、いよ〳〵發布せられたり。

高等女校令

第一條　高等女學校は女子に須要なる高等普通教育を爲すを以て目的とす

第二條　北海道及府縣に於ては高等女學校を設置すへし

前項の校數は土地の情況に應し文部大臣の指揮を承け地方長官之を定む

第三條　前條の高等女學校の經費は北海道及沖繩縣を除く外府縣の負擔とす

第四條　郡市町村（北海道及沖繩縣の區を含む）又は町村學校組合は土地の情況に依り須要にして其の區域內小學教育の施設上妨なき場合に限り高等女學校を設置することを得

第五條　郡市町村立の高等女學校にして府縣立高等女學校に代用するに足るへきものあるときは地方長官に於て文部大臣の認可を受け府縣費を以て相當の補助を與へ第二條の設置に代ふることを得

第六條　私人は本令の規定に依り高等女學校を設置することを得

第七條　高等女學校の設置廢止は文部大臣の認可を受くへし

高等女學校の設置廢止に關する規則は文部大臣之を定む

第八條　公立高等女學校の位置は文部大臣の認可を經て地方長官之を定む

第九條　高等女學校の修業年限は四箇年とす但し其地の情況に依り一箇年を伸縮することを得

高等女學校に於ては二箇年以內の補習科を置くことを得

第十條　高等女學校に入學することを得る者は年齡十二年以上にして高等小學校第二學年の課程を卒りたる者又は之と同等の學力を有する者たるへし

第十一條　高等女學校に於ては女子に必要なる技藝を專修せんとする者の爲に技藝專修科を置くことを得

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

高等女學校に於ては其の卒業生にして某學科を專攻せんとする者の爲に專攻科を置くことを得

第十二條　高等女學校の學科及其の程度に關する規則は文部大臣之を定む

第十三條　高等女學校の教科書は文部大臣の檢定を經たるものに就き地方長官の認可を經て學校長之を定む但し文部大臣の檢定を經たる教科書を使用する必要あるときは地方長官は文部大臣の認可を經て臨時其の使用を認可することを得

高等女學校教科書の檢定に關する規則は文部大臣之を定む

第十四條　高等女學校の教員は文部大臣の授與したる教員免許狀を有する者たるへし但し文部大臣の定むる所に依り本文の免許狀を有せざる者を以て之に充つることを得

第十五條　公立高等女學校職員の俸給旅費其の他諸給與に關する規則は文部大臣之を定む

高等女學校教員の免許に關する規則は文部大臣之を定む

第十六條　高等女學校の編制及設備に關する規則は文部大臣の認可を經て地方長官之を定む

第十七條　公立高等女學校に於ては授業料を徵收すへし但し特別の塲合に於ては之を減免することを得

授業料入學料等に關する規則は公立學校に在りては地方長官に於て私立學校に在りては設立者に於て文部大臣の認可を經て之を定む

第十八條　本令の規定に依らさる學校は高等女學校と稱することを得す

第十九條　本令施行の爲に必要なる規則は文部大臣之を定む

附　則

第二十條　本令は明治三十二年四月一日より施行す

地方長官は文部大臣の認可を受け本令施行の日より四箇年以内第二條の設置を延期することを得

●橫濱女學校の假開校式　を擧行せしが當日は市内の有志數十名を招待し、梅田市長及び大谷嘉兵衛氏等の演説ありたり。尙ほ同校の現在生徒は四十餘名に過ぎざれど、四月に至らば各小學校高等科卒業生の入學志望者四百餘名ある由にて、其際に臨み盛なる開校式を擧行する筈なりと。

●裁縫科始業　鳥取縣八頭郡下弘郡村に裁縫科設置の件に就きて村長の外中本重次郎西尾淸次郎の兩氏最も熱心に盡力せしに依り、その結果殆んど三百五十金の寄附應募を得るに至り既に客臘三十一日を以てその竣功式を擧げ、本年一月より始業にかゝり由なるが、日々盛大に赴けりと。

●女子高等師範學校の學科追加　女子高等師範學校規程中に改正を加へ、同校の學科は從來文科理科のみなりしを、更に技藝科（同科の科目を倫理、教育學、國語、外國語、家事、習字、圖畫、體操とす）の一科を追加して來四月一日より施行する旨二月十五日文部省令を發布せり。

●熊本縣女子高等女學校の生徒服制　熊本縣女子高等小學校長は生徒父兄に對して、左の通告をなせり。

生　徒　服　制

一服裝は質素を旨とし異樣の風を避くべし

一衣服の品質は綿布若くは之と同等のものを用ゐ大凡左の制限に依るべし

衣　木綿、双子、瓦斯織の類

帶　綿繻子、毛繻子、めりんす等の類

但模樣色合等極めてはでやかならざるものを撰ぶべき

一止むを得ざる事情の爲一時制限に超過することある塲合には保護者より其理由を屆出本校長の承諾を受くべし

施　行　細　則

一衣服の制は下衣の類と雖も、其品質は本則定むる處に準ずべきものとす

一頭具は質素なる櫛笄根掛の外飾具を用ひしめざるものとす

一傘は紙張木綿張毛繻子張若くは之と同等のものたるべし

●大分縣の小學校裁縫專修科規程　大分縣にては、縣令を以て、尋常高等小學校に裁縫專修科を附設することに定めたり。入學生徒資格は尋常小學校卒業以前の者なるか、當分の内は此資格なきものにして、學齡に超過せるものゝ入學を許す。修業年限は一ヶ年以上、五ヶ年以下なり。設立及廢止共に知事の權限に屬す。

●割烹學校　日本橋區本町なる同校は、昨日の十月石井泰次郎氏が創立したるものなるが、男生は木曜の午後女生は日曜木曜の二日に授業し、授業科目は普通料理、茶會席、諸祝儀等の諸科に分ち教授方法は割方、煮方、獻立方、給仕方、庖丁式、包物、結方の諸種にて生徒の重なるものは男生は概れ割烹店、魚店、料理職人中の極めて斯道に熱心なるものにて、女生は家政上に注意せる紳士の令閨令孃多き由。いまだ開校以來日淺ければ教授方法も完全といふ程にはあられど、昨今にては百名近き入校者ありといふ。

●大坂市高等女學校授業料及び職員俸給　大阪市高等女學校にては、授業料及び職員の定數、幷に給料額を左の如く改正せんとて、近頃開かるべき市會に提出せんとす、決定の上は四月一日より施行する筈。

市立高等女學校授業料規則中本科一ヶ月金六十錢とあるを金七十錢に、技藝專修科一ヶ月金四十錢とあるを五十錢に改む其理由は同校の經費益增加するより其幾部分を生徒に負擔せしむるも過當にあらざるべしと云ふに在り

職員の定數教諭五人とあるを六人に、助教諭十人とあるを十五人と改め、其給料額に校長奏任待遇の塲合は年俸金八百圓以下金三百圓以上とあるを金千圓以下

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

と改め、教諭月給金五十圓以下金三十圓以上とあるを金二十五圓以上と改め、奏任待遇の場合は年俸金七百圓以下金六百圓以上を金八百圓以下と改む、其理由は現行の職員定數及び給料額は明治二十二年一月生徒定員三百名に對して規定せし者なるに、今は生徒の數七百名に及ひ、其定數を增加し且現行の給料額にては範圍狹く任用上不便なるによる、又教諭の給料額の範圍を三十圓より二十五圓と低下せしは、女教員と男教員との差を立つる必要ある場合あるによる。

◎人　事

●受賞姑婦

東置賜郡屋代村金子喜右衛門母　かつ

資性溫厚克く養母に孝事し夫長病中節食薄衣以て湯藥を贍ひ衣帶を解かずして看護し家計漸く衰頽に歸するを憂ひ辛酸多年遂に家產を恢復するを得其貞操を堅守し一家を齊正すること爰に二十餘年誠に奇特とす仍て其賞として木盃一組下賜候事

明治三十二年一月十四日　山形縣知事正五位勳四等　曾　根　靜　夫

東置賜郡屋代村金子喜右衛門祖母　さく

資性溫厚克く婦たるの道を盡し且つ心を家事に注き夫沒後實子長病に陷り多く資產を失ひ家道衰頽に傾くを以て婦と協力して嫡孫を扶け其後見となり苦辛遂に家產を回復するを得、志操を變せざること爰に廿餘年誠に奇特とす仍て其賞として木杯一組下賜候事

明治三十二年一月十四日　山形縣知事正五位勳四等　曾　根　靜　夫

●貞婦受賞

氣仙郡氣仙村　菅　野　み　わ

一金五十圓

天資溫厚堅實能く婦道を盡し夙に節婦の聞えあり明治の初年夫善助精神病に罹り行作大に亂る其の刀鎗の危に接すると日に幾回なるを知らず子女稚く母老ひ共に扶持するものなし後嫡子善太郎年齒稍々長じ家政を理したるもの忽ち理財の道を誤り數年ならずして產業傾墜殆んど衣食の道なし而して善太郎疾病に罹り床に臥すと前後十年遂に死亡す是に至りて家計益々難なり然れども毫も意とせず勤儉努力志操愈々固く一は以て母を安じ一は以て病夫を看護し蓬髮梳らず縕巾裂なく嚴暑隆冬其の勞に服すると三十餘年一日の如し世人皆之を敬稱し玆に本村議會の決議を擧げ前記の金員を贈り以て其貞節を旌揚す

明治三十二年一月二十日　岩手縣氣仙郡氣仙村長　安　倍　芳　吉

●美談一束　可憐の孝子　高松市石尾兼太郎（十三）（東京朝日新聞）（二月八日）○孝女　愛知縣丹羽郡旭村廣瀨ケイの娘クヨ（二十二）（東京日々新聞二月七日）○孝貞　羽前南置賜郡崖田村星文五郎妻節（東京朝日新聞二月六日）○忠婢　越前三田某の下婢ユミ（同上）○篤行　兵庫縣藤原才吉（同上）○孝女、岡山縣吉野郡西原倉村河野友藏娘さく（十六）（同上）○貞婦の投身　埼玉縣南埼玉郡岩槻町雛製造業柴田甚藏の妻阿若（二十九）（萬朝報二月九日）○感ずべき少女　愛媛縣宇和島高等小學校第二年生辻田ハルヱ（十二）（東京日々新聞二月四日）○盲女の手紙　府下荏原村蒲田村新宿當間安兵衛の四女盲者アカ（二十一）（時事新報二月十四日）○孝女ハマ群馬縣甘樂郡下仁田町久保田八十三娘ハマ（十六）（國民新聞二月四日）○感ずべき少女　千葉縣山武郡豐成村盛行寺兼吉長女せん（十二）（新總房二月四日）○貞婦神戶市藤田房次郎妻ノブ（東京朝日新聞二月十六日）

◎會　合

●信州上田の婦人談話會　一月廿九日同地明倫堂に開會、長野、上田中學兩支校長を始め出席せるもの七百餘名、會長の開會の辭及び將來の方針に就ての演説、贊成者の演説等ありたる後、琴、洋琴の合奏及び强聲發音機の實驗等の餘興ありて盛會を極めたりと云ふ。

●信州岩村田婦人會發會式　岩村田婦人會にては一月廿九日岩村田學校第一講堂に於て發會式を擧行したり。列席者は村長、學務委員、郡視學、學校職員、新聞記者等より普通會員七拾貳名にして、發起人總代小林さた氏の開會の趣旨、湯本本社員（日本婦道論）與良郡視學（女子教育）佐藤實太郎（女德論）秋山淸作（演題未定）諸氏の演説あり。終て發起人十數名にて向後の隆盛策を講じ茶菓の饗應ありて散會したり。全會は隔月（丁の月）第四日曜日に開會の規定なり。又發起人總代は菊地うた、小林さた、小原ますの三氏なりといふ。

●仙臺に於ける大谷派布教と婦人教會　昨年來大谷派にて仙臺に布教の端緖を開き、工女教誨、監獄教誨、軍隊布教等あらゆる方面に手を延ばし、頃日又た婦人教會を設け、廣く會員を募り近々機關雜誌を發行する筈なりと。

●婦人衛生會　二月十一日芝區愛宕町靑松寺にて開會したる大日本私立婦人衛生會にては、醫學士山根正次、ドクトル長與稱吉、醫學士土肥慶藏三氏の演説ありといふ。

●大日本婦人教育會　同會にては、今回兒童の爲めの會合を開く事となり、巖谷季雄（漣山人）每常集會每に講演することゝなり二月十八日には其第二回を開く。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

新著豫告

巖本善治編

海舟餘波

三月五日出版

海舟先生最近の寫眞(コロタイプ)を挿み、又た先生曾て鐵舟の死を弔し文を以て喝す。今ま其の草稿を寫眞版として附す。修辭慘澹、筆跡烈火を發す。而て先生亦亡し。悲矣哉。

編者、先生に聞く毎の者總て筆記し久しく珍藏せり。皆是れ當日當時の筆記たる故に、一語も漏さず、其語癖をも記せり。玆に其一部を公にして同友に示す。

一冊定價三十錢郵稅四錢。郵劵にて所望の仁は卅八錢あて送られたし

女學雜誌社　白

故若松賤子女史譯述

小公子

全一册洋裝美本
紙數三百五十頁
正價金三十五錢
郵稅　八錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演ぜらるゝこと數十回、一代の流行を左右して一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化す、傍に隣あり、母に佳人あり、貧しきを憐み、小作者を愛撫し、言行總て甘露慈雨の如し、讀去り讀來るうち讀者亦自から感化せらるゝことを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや、少年固より讀まざる可からず、婦女老人亦讀まざる可らず。賤子女史曩に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、曾て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に卷を棄る能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるゝと切なり。即ち玆に其遺稿を收め、女子が一周忌日に合して前後二篇を合せ刊行せしめたり。其友湘煙中島女史は字を題し、鄕友松井昇氏は畫圖を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

大賣捌　東京巢鴨村庚申塚　女學雜誌社

故若松賤子英文集

巖本嘉志子

一册正價
金六十錢
郵稅
金六錢

小公子の譯者故若松賤子の英文述作に於けるや筆路頗る流麗なるを以て稱せらる。今此書は即ち女史が英文廿一篇を收めたるものにして、加ふるに女史の師友ブース氏及其他内外知友記する處の女史の小傳追憶記等を以てし、また女史の肖像を揭く。蓋し以て内外家庭の團欒の友となすべく、又以て尋常中學高等女學校等の英語教科書となすに最好なりとす。

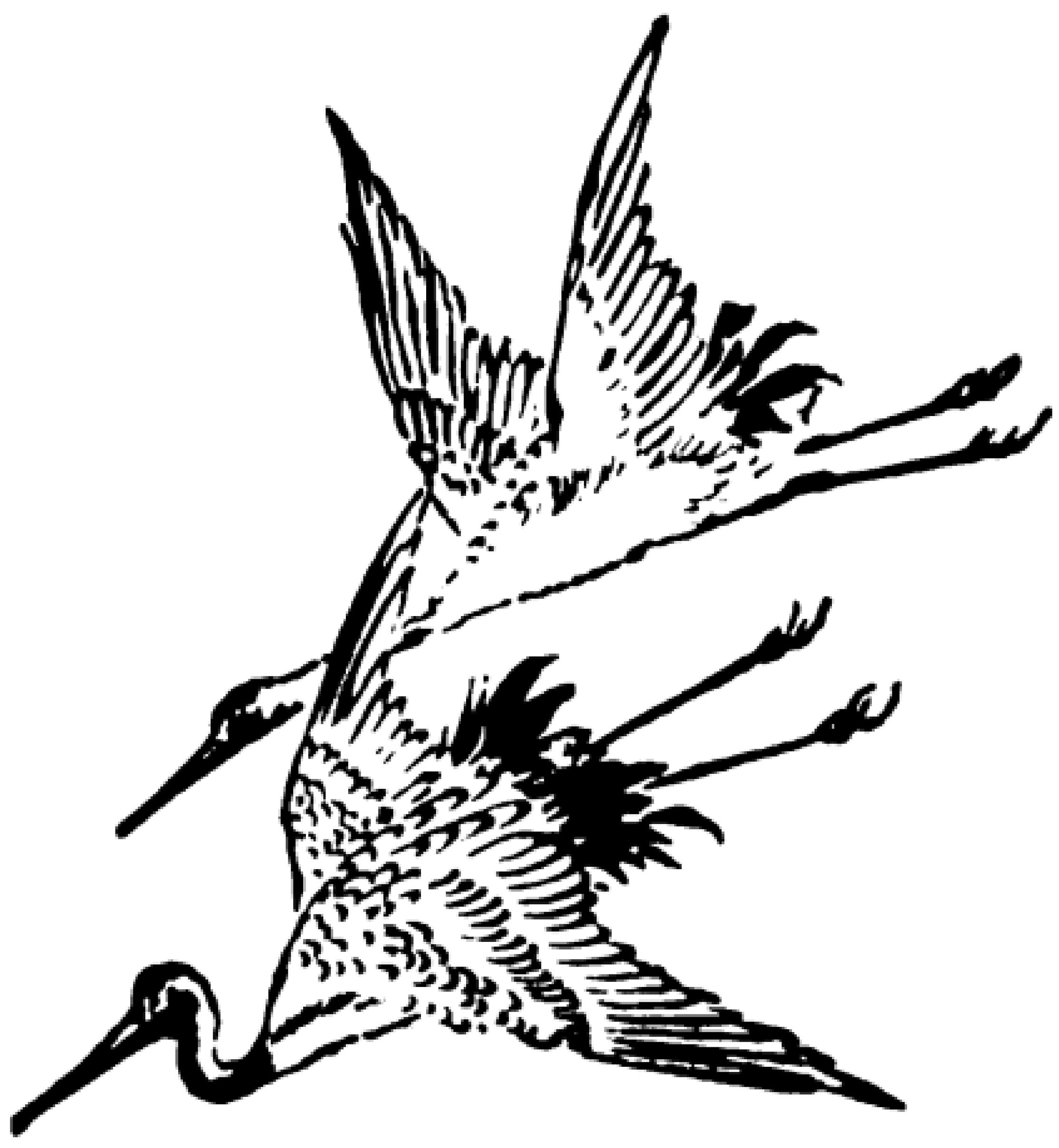
發賣所　東京巢鴨村庚申塚　女學雜誌社

『巖本嘉志子』に對する批評

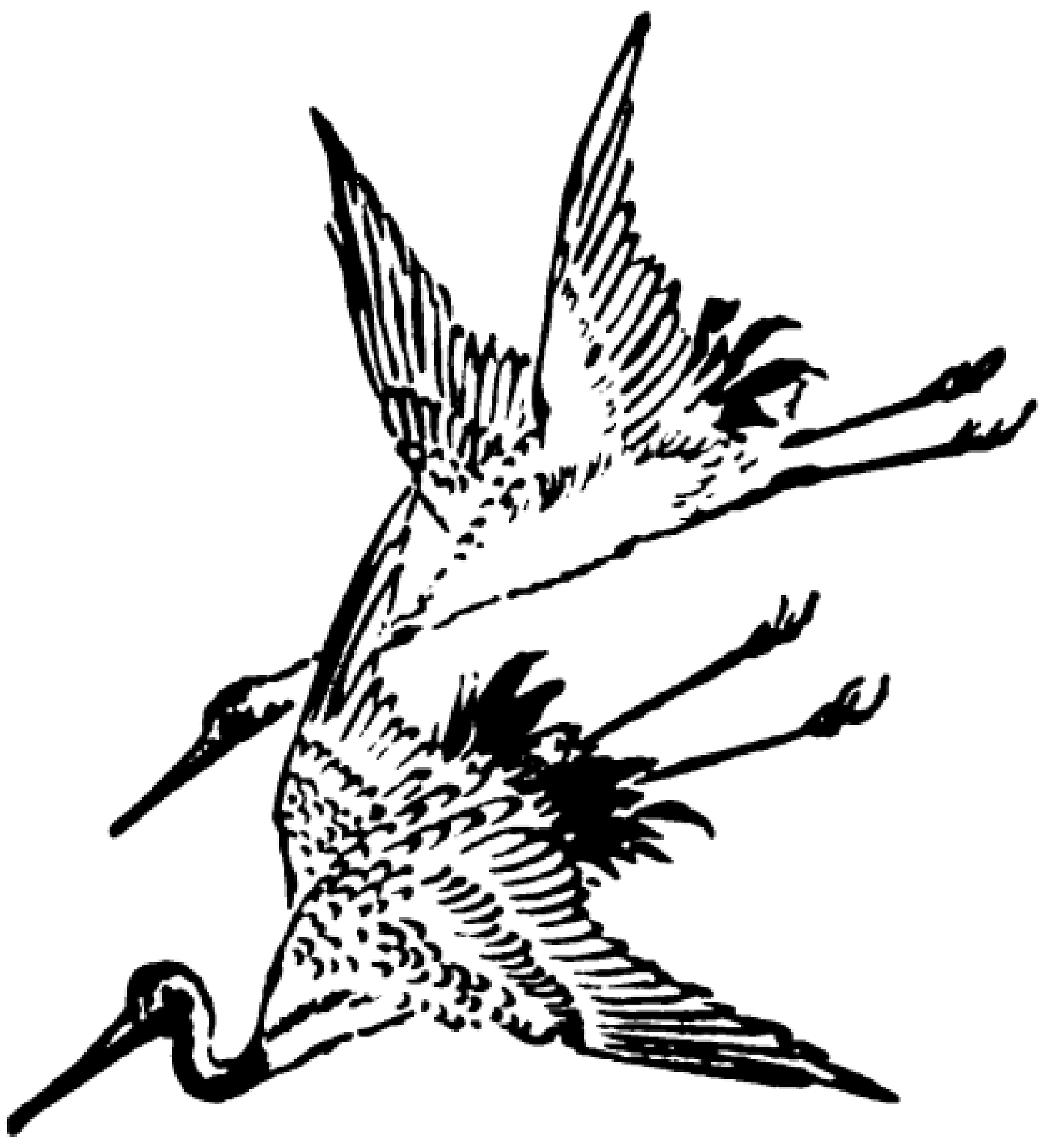
故若松女史が紀念にと、女史が英文の遺稿を集めて、其内外の知己及び良人巖本氏の發行せしものなり。其の文字の簡明にして好く選ばれたる高雅にして然りもなづまざる、流麗清新の文まことに Queen's English の純なるものに恥ぢず。神田氏、頭本氏なと今の英文士として知られたる人々の筆に成るものより、遙に自然にして生々したる心地す。否本國の女流と雖も、此文を成すもの蓋し少しとするに足るべきか。孤女學院を訪ふの記は、最初のあたり、少しく日本人が詩的形容の流弊に失したるの憾みあれど、皇后陛下皇太子殿下の御事を記し奉るの文字などめでたく覺ゆ。こと方行末さを題せる終りの一文、又一つの書簡に図館難船の事を記せるもの抔も筆力を見る。女子教育と基督新教とは最も深く女史が心に印せし如くに思はる。この有爲にして清新の思想を抱くの女史、早く故人となりてこの遺集をなす、これを惜しむもの、豈に其知己朋友のみならんや。

(文學界第四十七號、明治二十九年十一月三十日)

明治廿五年三月十五日逓信省認可



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可